IS『奇跡の生還者』

C・B

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ『奇跡の生還者』

【Ｎコード】
Ｎ７５９１Ｎ

【作者名】
Ｃ・Ｂ

【あらすじ】
女性にしか反応しない、世界最強の兵器『インフィニット・ストラトス（ＩＳ）』。世界のパワーバランスが崩れ、女尊男卑が当たり前の世界もなり１０年がたった頃世界で唯一ＩＳを動かせる少年織斑一夏がＩＳ学園に入学し、さらにもう一人の少年がＩＳ学園に遅れて入学してきた。彼は３年前に行方不明になった織斑一夏達の親友だった。２人の少年が舞台に加わりメカ×美少女　ハイスピード学園バトルラブコメが今始まる？

第1話　北の国からでなく某A国から

『ＩＳ』　正式名所：インフィニット・ストラトス

宇宙空間での活動を想定されて作られたマルチフォーム・スーツであり、当初は注目されてなかった代物だがある事件を境に世界に変革をもたらした『兵器』だ。この兵器の前には今までのありとあらゆる当時の最新兵器が鉄クズに等しく、その性能を恐れた各国の思考から『スポーツ』にと落ち着いた飛行パワードスーツである。

しかしこの兵器は何故か女性でしか扱うことはできず、それゆえ女＝偉いという意識が広まり世界は女尊男卑へと変化していった。

またＩＳの数もＩＳの中心たるコアを作る技術は完全なるブラックボックスと化しており、そのコアを唯一作ることのできる篠ノ之博士は一定数以上作ることを拒絶するため、世界各国のＩＳの総数は４６７機である。

そして世界にＩＳが発表され早十年の世界を驚かす出来事「世界で唯一ＩＳを扱える男」である織斑一夏の存在が発表され、各国は大騒ぎになった。

その発表がされ3月中旬にアメリカの上層部はとある人物をＩＳ学院に編入することを黙秘的に決定した。

アメリカ合衆国ミシガン州デトロイドにあるＩＳ開発研究所『バード・フライト』。広大な敷地をもつこの研究所ではごく限られた一部の人間しか入ることのできない場所が存在する。そこは研究所のＩＳ開発の中枢を握っており、広大な敷地がコンクリートの城壁で

囲まれ数多くの建物が連結している通称“第一技術特区”と呼ばれている。。

「さて、荷物は先に送ったから問題はないな。地理的変化は3年に立っただけだからそれほど変わってないかと思うが…」

「まだ、ここにいたのですか？」

休憩室に閉じこもり2時間ぐらいしたところで声がかかった。

今までにらめっこしていたノートパソコンの画面から目を離すと目の前にはメガネをかけたクールな印象を与える女性がいた。

「ついさっき、フィリシア博士は明日に向けて睡眠をとりました」

僅かなミルクと砂糖を入れたコーヒーいれたカップを差し出してくれる。相変わらずいい豆を使っているんだろうか、程よい香りが鼻を通る。

「まだ昼過ぎだし先生は2徹（徹夜2日間）ぶり睡眠だから仕方ありませんよ」

そう言いながらコーヒーを一口頂く。長い間アメリカにいたせいかコーヒーの匂いは気にっている。でもまだブラックは苦しいので隣にあったミルクと砂糖を昔見た魔砲少女アニメのとある艦長さんぐらい投入する。

「あいかわらず貴方はコーヒーの味を無駄にする人ですね……」

「いいんです。オレは匂いを楽しんでいますから」

そう言い訳じみた事を言いながら午前中に制作した報告書がはいっているメモリーチップを渡す。

「確かに受け取りました。それと整備班の機付長から『ＩＳのオーバーホールは終わり、最終微調整に立ち会ってほしいと』との連絡が」

「了解しましたよ……っと！」

パソコンをシャットダウンさせて背伸びをする。

ああ、体中がバキバキなっているな～。

「私はこれで失礼します。Ｍｒ．アキラ明日は早いのでご早めの就寝を」

「わかっていますよ」

秘書の女性が席を立ち去り、俺はノートパソコンを閉じ隣にある雑誌に手を伸ばす。

机の上にある一冊の雑誌の表紙には世界で唯一ＩＳが使える少年の写真がデカデカと掲載されていた。

「お前のせいで日本に帰ることになっちまったよ。３年ぶりに会う悪友の顔を忘れていないよな？」

少年・轟（とどろき）　輝（あきら）は苦笑しながらコーヒーを飲む。

「うえっ、砂糖を入れ過ぎた！甘ッ！」

第1話　北の国からでなく某A国から（後書き）

どうもC・Bと書いてコーヒー・ブレイクと読む筆者です。

初投稿ゆえ変な表現があるかもしれませんがこんな駄文でも読んでくれるとうれしいです。

第2話　子牛は決して狼に勝てない

アメリカ合衆国ミシガン州デトロイド
ＩＳ開発研究所『バード・フライト』正面ゲート前

ついにこの日が来た。目の前にはここで生活していた時にお世話になった大勢の“第一技術特区”の人々が見送りに来てくれている。

「アキラ！絶対に帰ってこいよ」

「頑張ってくださいアキラさん」

「キミなら…やれるから……」

数多くの声援を受けながらオレも別れの握手をする。

「あらあら、人気者ね輝」

今までオレを囲んでいた人々の波がモーゼの滝の如く分かれ、その間をブロンドの髪をなびかせる白衣を着た女性　フィリシア博士が現れる。

「これから3年間は悪いけど向こうで暮らしなさいよ」

「ええ、そのつもりですよ」

「あと私が作ったその子を頼むわよ。くれぐれもＩＳ学園の同級生なんかに負けたら承知しないわよ？」

「そう…ワタシの弟子だから……ね…？」

「2人に面倒を見てもらい、皆さんの思いが詰まったコイツとなら問題ありません」

フィリシア博士が意地悪く微笑み、ＩＳの訓練に付き合ってもらった教官がうなずく。

「Ｍｒアキラ。すいませんがそろそろ時間です。」

後ろに控えていたボディーガードマンが声をかけてくる。

「わかりました」と素早く言い、研究所の人々に振り向く。

「アキラ・トドロキ、これよりＩＳ学園に入学します。それでは行ってきます！」

「「「「「「いってらっしゃい～！！！」」」」」」

そして空港から飛行機で空の旅を１５時間満喫した後、無事日本につきいくつもの電車を乗り換え、ＩＳ学園の出迎えが来る予定の場所とはまったく違う、駅前でぶらついていた。

実は予定より一本早い便でこっちに来たので時間が余っているからだ。

今日は日曜日なので親連れやカップルに友人達と戯れるグループなど多くの人が歩いている。

かつて最後に訪れた3年前からあった建物やなくなった店、建ち始めるビルなどまるで自分がタイムスリップしたような感覚だ

「おっ…アイツは……」

信号が青になり大きな横断歩道を渡っていると目の前にイヤホンを耳につけながら歩いている見知った顔がいた。

五反田　弾。中学一年の入学式当日に一夏と共に知り合って、俺と一夏とはやたらと馬があった。久しぶりに見るが最後に見た時とあまり変わらなかったのですぐわかった。

こっちは人ごみに紛れているために気づいてなさそうだがそれでいい。ここで見つけられ騒がれるのは多少困るからだ。オレはさらに人ごみに紛れながらその場をやり過ごした。

しばらく歩き、人があまり通らない裏道り歩きながらをふと呟いた。

「まだ時間まで結構あるな…。これからどうしようかな？」

「心配するな。お前はこれからＩＳ学園に直行だ。」

呟いただけで答えが普通返ってこないのに答えが帰ってきた。しかもこの声質は会いたくない声の持ち主だった。

オレは聞き間違えだと信じて首を……振り向かず全力疾走を行った。

自分でも出せるとは思えなかった速さを出し、オレはさらに加速を…

ガッ！

「ほう…私の声を聞き迷いもなく逃げるとはどういうつもりだ輝？」

「そう言いながらも織斑千冬は女性とは思えないほどの握力でオレの首根っこをわしづかみに…って力入れないで、千冬さん！イタイ！苦しい！息出来ない！」

「ふん、まあ座れ」

ブンッ！

決して人を座らせる動作でない動作でオレは近くのベンチに投げ飛ばされた。

首根っこが痛ぇ～。

「予定より一本早い便でこちらに付きぶらつくとはこちらにとっていい迷惑だ」

目の前には黒いスーツにタイスカート、高い長身に狼を連想させる鋭い吊り目を持つ女性　織斑千冬が立っている。おそらく歴史上の猛者たちもこんな目をしていたに違いない。

しかしなぜ千冬さんがここにいるのだろうか？」

「私がＩＳ学園の教師でお前を迎えに来たからに決まっているだろう」

すげぇ、読唇術まで習得しているとは…。

「いや、途中から口から出ていたぞ」

うわぁ、恥ずかし！……ってまてよ・・・・・・千冬さんがＩＳ学園の教師だと？

あぁ、久々に会ってこれかよ…。どうやらＩＳ学園ではスパルタ教育が……

パァンッ！

おお、久々に千冬さんのチョップが頭に響いた。

普通、人の顔は丈夫にできていて特に頭部はもっとも硬いのに千冬さんは全く痛そうにしていない。

いや、むしろオレが痛い。

「お前もあいつと同じように失礼なことしか考えられないのか」

あいつとはまず１００％一夏のことだろう。千冬さんの本心は一夏のことに結構気を使っていたからな。

え～とたしか、こういうギャップをツンデレって言うのか？

ダメだ、わからない…3年間この国にいなかったブランクは大きいよ博士。

「さて、そろそろ行くぞ」

そういってオレは再び首根っこを掴まれ連れて行かれる。

オレは脳裏にある一曲が巡った。それはとてもかわいそうな内容だった。

ある日晴れた～　昼下がりの～　市場へ～　続く道～

ドナ　ドナ　ドナ　ドナ　小牛を乗せて～

ドナ　ドナ　ドナ　ドナ　荷馬車が揺れる～♪

第3話　入学には遅れて過ぎだと思う

≪一夏ｓｉｄｅ≫

俺の名前は織斑一夏。

何故か女性にしか反応しないＩＳを動かすことのできる男だ。

今日は月曜日で一週間前にこの日にＩＳ学園に入学して初日から千冬姉に何回も叩かれるれ（おかげで初日だけで脳細胞が万単位で犠牲になった）、６年ぶりの幼馴染である篠ノ之箒に再会する（同じルームメイトになり殺されかけた）、イギリスの代表候補生　セシリア・オルコットに決闘を挑まれる（ＩＳについて甘く見ていたのでＩＳ関係の知識に悪戦苦闘する）、女子には学年問わず質問攻めにされる（まるで拷問のようで質問は終わることのない）などといきなり波乱万丈なスタートから始まった。

そして早一週間、今日はセシリアと決闘がある日だ。

しかし決闘は今日の放課後に行われるのでこうして朝早くＨＲで一時間目の準備をしている。

「あ、織斑君だ。今日はがんばって～」

「放課後、織斑君を応援するからね」

「やー、おりむー。ファイト、ファイト」

「骨は私の墓に持って行くから心配しないで」

朝から俺の周りに女子が来てくれて励ましてくれる。

…って誰だおりむーっていった人？

後、死ぬ気はないぞ俺。

キーンコーンカーンコーン。

「諸君、おはよう」

「お、おはようございます！」

予鈴が鳴ると同時に一組担任教師　織斑千冬先生が入ってきた。

今までわいわいと騒いでいた女子達は同時に挨拶をする。無論俺もちゃんと挨拶をしている。五分前だというのに各自すばやく着席し、一時間目の授業に備える。

「ホームルーム五分前だというのに着席とはよほど勉強に熱意があると見えるな」

貴方に当てられる怖いからです！と俺以外も絶対多くの女子が思ったに違いない。

ＩＳ学院生活２日目に時間ギリギリまで騒いでいると騒いでいた人物を中心に授業で当て、答えられなかったら「授業が始まる直前までお喋りをしていたものだから完璧だと思ったんだがな…」と皮肉を言い放たれ、次の授業から全員が授業開始一分前には着席するよ

うになった。

「まあ、今日は少々早くＨＲを始めるつもりだったからな、ちょうどいい。山田先生」

「はい織斑先生、こっちはいいですよ」

そういいながら教室に入ってくる一組副担任教師　山田真耶先生。

若干大きめの黒縁眼鏡をかけており相変わらず生徒と変わらないで身長で、服のサイズがあっていないのかがだぼってしているため一言で言うなら『子供が無理して大人の服を着ました』的な不自然さを持つ教師だ。

「今日はなんと入学生が来ます！本来なら遅れて…」

「え……」

「「「えええ！？」」」

いきなり山田先生がそんなことを言うものだからクラス中がいっせいにざわつく。

バンバンバン！

「諸君、静かにしろ。まだ説明の途中だ」

出席簿を手で叩きながら千冬姉が注意するとまるで誰もいないかのように静かになる。

この教室は千冬姉という調教者にたった1週間で躾けられていることがよくわかる。

「では山田先生、続きを…」

「は、はい。え～と、本来なら1週間前に来るはずだったんですけど、向こうの都合で一週間遅れて、今日このクラスに入ってきます。」

そういえば窓際の列に机が一つ増えていることに今さらながら気づいた。

なんで朝早くに来たのにこんなことに気づかなかったんだろう。

『木の葉を隠すなら森の中』という奴だろうか？

「それでは入ってきていいですよ～」

ガラッ

「えっ……」

そう思っていると扉が開き、1人のＩＳ学園の制服を着た生徒が入ってきた。女性なら誰もが羨ましがる長くそして美しい黒髪を後ろに束ね、腰辺りまでそれは伸びている。体はスマートで長身であるため制服が見事に似合っており、黒眼で東アジア系の顔つきをしている。

「どうも、はじめまして。轟　輝です」

しかもそいつは驚いたことはそいつは……俺と同じ男性用の制服を着た男だった。遠くから見れば確かに女に見間違えるかもしれないが、全身からにじみ出る雰囲気や顔つきも男の特徴が出ている。

「あ…」

「きゃ…」

そして一番驚いたことがそいつは3年前の夏休みから行方不明者になっていたはずの小学2年生から親友だった轟輝（とどあきら）だった。

「「あ、輝～っ！？」」

「「「「きゃあああああーーーっ！」」」」

俺と箒の驚きの声はごく一部を除いた女子生徒の黄色い声援に消された。

≪輝ｓｉｄｅ≫

教室に入り、軽い挨拶をした後、オレの鼓膜を襲ったのは女子による音量兵器だった。

（耳が痛い・・・・・・）

「みなさん、落ち着いてください～！まだ輝君の紹介が…」

山田先生が頼りなさそうにクラスの騒いでいる女子に注意する。

「うるさい黙れ、お前ら。まだ自己紹介は追っていないぞ」

千冬さん・・・でなく織斑先生が注意すると皆、一斉に黙り込みオレの方に向く。

さすが千冬さん。一回で黙らせるとは・・・。

「えー……では改めまして、轟輝（とどろきあきら）です。今日からこのクラスで皆さんと一緒に過ごすことになります。よろしくお願いします。」

教卓の横で儀礼的に頭を下げ顔を上げると、そこには「まだ、喋るよね？」的な顔をした視線がオレの全身を貫こうとしている。

ふっ、いいだろう。この時のために飛行機の１５時間の内、数時間をこういう時のためにどう言えばいいか考えたからな。

一夏よ、多少強引だが犠牲になってもらうぞ。

「よう一夏、久しぶりだな」

「「「「えっ！」」」」

未だに金魚のように口をパクパクさせている一夏に声をかける。

当然周りは驚く。（山田先生も）

っていうか口をパクパクさせ過ぎだと思うが…お前の前世は金魚か？

「本当に…輝なのか……？」

「いや、さっき自己紹介で2度も言ったが」

「お前、生きていたのか…」

いや、確かに3年前に行方不明者だったが死んだことにするな！…ってあれ？一夏じゃないぞ、いまの声？

ふと横を見渡すとオレに向かって指をさす生徒が一人。

（誰だ？）

オレはそう思いつつもなんとか返事を返してみる。

「キミはもしかして……佐藤さん？」

がたたっ。思わずずっこける女子が数人いた。

どうやら『とりあえず佐藤って言えば当たるんじゃね？』作戦は失敗に終わってしまった。

日本で一番多いからとりあえず言ってみたがやはり駄目だな…。

「佐藤ではない！篠ノ之だ！」

ばんっ！と机をたたく篠ノ之さん。

「そうかわるかったよ篠ノ之さ…ん……だと…」

ここで本日のおさらいだ。彼女が立ち上がったついでにもう一度その人を見てみよう。

まずは平均的な身長を持ち、髪型はポニーテール、少し不機嫌そうにみえる目つき、そして何故かどこかしら日本刀の中でも名刀を思わせる印象。

いくつもの特徴がピースになってオレにある人物を思い出させる。

「もしかして篠ノ之道場の箒なのか！」

そう言うと軽く箒はうなずく。

（まさか箒までいるとは…完璧に予想外だった。）

パアンッ！いきなり頭に衝撃が来た。

「自己紹介が終わったならさっさと席につけ馬鹿者」

いつもより2割増しのような気がしますか千冬さん。

そう内心思いながら、黙ってオレは空いている席に着く。

「では、ＳＨＲ（ショートホームルーム）は終わりだ。今日もいつも通り授業を行う。以上だ。」

そうしてオレの学園生活が始まった。

あ、そうだ。あとで一夏と話すか。

ピーンポーンパーンポーン

ただいまオレは想定外のアクシデントによりピンチです。

一時間目が終わった瞬間にそれは起きた。

「ねえねえ、轟くんさあ！」

「はいはいは～い！質問質問！」

「織斑くんや篠ノ之さんとどういう関係なの、轟くん！」

授業が終わり織斑先生と山田先生が教室から出ていき、オレも一夏と話そうかと席に立った瞬間にクラス中の女子が殺到してきた。

と思ったら一夏もオレと同じく、女子に囲まれていた。

精神的に『ば、馬鹿なこんなデータはないぞ！うわあああぁぁぁ！！！』という感じで、オレは休み時間に入るごとに学年関係なく女子に毎時間、殺到され一夏とまともに話せたのは昼休みになってからだった。

チャンチャン♪

第3話　入学には遅れて過ぎだと思う（後書き）

ようやく原作突入です。轟　輝の容姿をさらにわかりやすくいえば、髪を真っ黒に染め上げたマクロスFの主人公“早乙女アルト”みたいな感じです。（この容姿に決定したのはちゃんと理由があります）

輝のＩＳはもう少ししないと登場しません。（たぶん後1，2話ぐらいかな？）

あと誤字・脱字の指摘、できれば感想をよろしければお願いします。こちらも何回か読みなおし、間違ったところもしくは違和感があるところは自力で直していきたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。

第４話　案内と挑戦状と迷子と

第４話　案内と決闘と迷子

「―よって、ＩＳは…」

キーンコーンカーンコーン

「あら？なっちゃいましたね。では今日はここまでです。」

授業終了し、山田先生が教室を出ると同時に女子達がこちらにまたは一夏に体を向け、スタートダッシュ５秒前の姿勢に入る。

またあの拷問が開催されるのか！

（くっ、このままではまた同じ過ちに…、しかたない！）

「一夏っ、箒っ」

突然、名前を呼ばれびっくりしながらもこちらを向く2人。

「すまんが食堂まで案内してくれないか？」

「ああ、いいけど……」

「私は…（チラッ）…かまわない……」

先手必勝。なんとか女子に襲われる前に2人と合流する手立てはできた。

箒が一瞬だけ一夏の事を見たのを見逃さなかった。
（あいかわらずだな、箒は少しは素直になれよ）

「ああ～っ、先に行動されちゃった…」

「もう出遅れるわけにはいかないのに…」

「まだよ、まだチャンスはあるわ…」

なんか女子達の間で独り言が聞こえたが、俺の精神は休み時間ごとに質問攻めに遭っているため弱り切っているので気にしている余裕がない。

ここらで旧友達と気軽に話して回復しなければ、放課後には『返事がない。彼は燃え尽きてしまったようだ…。』という返事しか返せなくなってしまう。

オレと一夏、箒は教室から出て箒に先導してもらいながら廊下を歩く。

すると奇妙なことに教室を通り過ぎると同時に勢いよくドアが開き、オレ達の後ろを歩く女子が増えていく。
なんだこの状況は？別にオレ達はピクミンの親玉じゃないぞ？

オレは一夏と箒と共に食堂に来た。

「すげえ混んでやがる…」

オレ達が座れる席はありそうだが、早くしないと席が無くなりそうだ。

「これがいつもどうりだな」

「ふんっ、早く食券を買うぞ」

オレの独り言に一夏が答え、そスタスタと箒は職権売場に向かう。

「箒、俺は…『どうせ、日替わり定食だろう』…そうだ」

一夏の思考を先読みするとは…さすが一夏曰くファースト幼馴染。

「あ、箒。俺もそれで」

「わかった」

そういって職権売場の人混みの中へ箒は消えた。

ちなみにオレはファースト親友だ。

まあ、厳密に言えばオレも幼馴染だが、ファースト親友の方が断然いいに決まっている。

だって、『幼馴染』ってなんだか女子限定みたいな感じがするし、男子はそれより『親友』の方が断然かっこいいからな。

あと、ファースト（1番目）の方がいいと当時オレがいったからだ。小さい時って一番に憧れるよな？

「なあ、輝」

「なんだ一夏」

突然、一夏が話しかけてきた。その顔を見ると目つきが少々真剣だった。

まあ、なにを聞きたいかは予想がつくんだけどな

「お前は今まで一体どこにいたんだ？」

ほらね。

「アメリカのデトロイド州にちょっくらＩＳのテストパイロットになっていた」

「は？」

「悪いがその続きは今夜にしてくれ」

オレが職権売場の方向に指をさすとそこには３枚の食券を持ちこちらに帰ってくる箒がいる。

「取ったぞ。日替わり定食３枚だ。さっさと席につかないと座れなくなってしまう」

「了解。一夏行こうぜ」

「わかった」

まあ、聞きたい気持ちはわかるがその話は少々長くなるから今は勘弁してほしい。
しかたない、違う話題を持ち出すか。
「そういえば一夏。お前今日模擬戦やるんだってな」
「ちょ、お前なんで知ってんだ！？」
「昨日織斑先生から聞いた。…しかし驚いたよ、お前がそんなに早く模擬戦をするなんてな。」
「しかたないだろ。オルコットに…」
「はい、日替わり定食３つお待ち」
「ありがとう、おばちゃん。」
一夏はおばちゃんから定食を受け取る。
中途半端な所で止めるな！気になるだろ！
「今日もうまいからね。御飯のおかわりはいつでも言ってよね」
恰幅のいいおばちゃんが笑いながら言う。実際、目の前にある“ハンバーグ定食”はうまそうだ。
ざわざわと騒いでいる学食はいかにも学校の食堂という雰囲気が出ているような気がする。

「いい雰囲気の食堂だな…」

アメリカではこうはいかない。

向こうではセルフサービスが主流だからこんな付き合いわ存在しない、

「そうだろ、俺も気に入っているよ」

「あそこが空いているな。」

箒の視線の先には長いテーブルの端にちょうど3人分空いた席がある。

「ちょっとごめん。隣、いいかな」

「でさぁ……へっ？」

食事中に話していた女子に話しかけるとポカ～ンとこっちを向いて固まった。

「へっ、男の子？」

「…もしかして転校生の轟君？」

「うそ、マジで！？しかも織斑君も一緒よ！」

「ああ、この瞬間をキリストに感謝しなくちゃ！」

まあ、そりゃあ騒ぐよな。このＩＳ学園にたった2人しかいない男

子の1人に話しかけられているから。

っていうか日本人なのにキリストに感謝するのはどうかと思う。まあ、日本人の宗教に対する意識は少ないからな

「ど、どどどどどうぞ！！！」

なんだかすごく動揺されているよな？いや、されているよな。

「失礼します」

そういって女子の隣に座る。

正面の女子の隣に箒、端っこに一夏が座る。

箒の隣の人が少し残念な顔している。きっと一夏が座ると期待をしていたんだろう。

対照的に箒の顔は少しご機嫌そうに見える。

「で、話の続きなんだが一夏、なんでまた模擬戦を？」

日替わり定食を食べながら一夏は話してくれた。再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める時、一夏をクラスのほとんどが推薦し一夏が強制的に決定されようとした時、セリシア・オルコットという女子が名乗りを上げた。彼女はプライドが高いらしく、代表候補生かつクラス一の実力を持つ自分を差し置いて一夏がクラス代表になることが納得いかず、怒涛の言葉を言い続け、少しキレてしまった一夏が何気なく言った一言が愛国心の高いセリシアの怒りにふれクラス代表をかけ決闘することになったらしい。

「ふ～ん、それにしても代表候補生相手とは大きく出たな一夏。勝てるんだろうな」

「そのために私が一夏の依頼を受け直々に、この一週間鍛え直してやった」

「ふ～ん。箒が一夏にＩＳの指導をしっかり叩きこんだのか」

「「……えっ？」」

ちょっと待て。

なんだ、その返事は？

「ちょっと、よろしくて？あなた」

一夏達に詳しく問い詰めようとしたら、横から声が聞こえふと、見ると地毛が金髪で白人特有の碧眼を持った女子がいた。
ロールがかかった髪は高貴なオーラを出していて、その女子の雰囲気も『いかにも』今の女子という感じだ。

いや、元からこんな喋り方かもしれない。容姿のせいか違和感が全くない。

ちなみに何故『いかにも』かは簡単に説明すると
ＩＳが使えるのは女性だけ　よって女性は偉い　男性の立場はなく
身分が低い
ということだ。

よくわからなかったら原作へＧＯ！

「どういうことだ、まだ試合には早いだろう？」

「あら御心配無く、あなたに用はありません。あなたこそ今日の試合前にして逃げないでくださいね？いや、逃げてくれた方がまだ面白みがありますわ」

「貴様！そんな言い方は…」

一夏の問いに馬鹿にするように答えた女子にかみつく箒。

なんだこの状況？

まあ、オレには関係がなさそうだ。

これ以上一夏にさっきの事を問い詰めれないと判断したオレはあることを思い出して、デザートのパインを一夏のサラダに投げ込んでパインサラダに変えていく。

意味？

こうすることによってなにかのフラグが立つと、昔近所のお兄さん教えてもらった。

ちなみに“なにか”はしらないけどね。

「ちょっと聞いていますの！」

ふと見ると何やらこちらを睨みつけている女子がいる。いや、さっ

きオレ達に話しかけた女子だけど…。
どうやら話は終わったのかな？
「なに？オレは今、一夏のサラダをパインサラダにすることで忙しいの」
「くっ。わたくしを馬鹿にしているのですか！」
バンと机を叩く女子生徒。まずい、怒らせてしまっている。
一夏はオレに向かって『これじゃあドレッシングがかけれない！』と言っているが無視だ無視。
「そりゃあ、すまないな。で、何の用だ？」
「ふんっ、ここでは少し話しにくいので廊下に出なさい」
「やれやれ、わかったよ」
腰を掛けていた椅子から立ち上がる。
「お、おい輝？」
「あ、一夏。悪いけどオレの食器片付けてくれ。あとサラダも食えよ」
食堂を出て、校舎の端にある極めて人通りの少ない廊下で止まる。
「さて、なんのようだ？」

「ふん、その前に自分の喋り方を直しなさい。本来ならばわたくしのような高貴な人間と喋れる機会などそうないのですから」

ふ～ん、高貴な人間ね。そうならその高貴の人間に相応しい器のでかさって奴を見せてほしいものだけどね。

「そうかそいつはすまなかったセシリア・オルコットさん」

「あら、あなたは彼とは違いわたしくの事を知っているようですわね。すずめの涙ほど感心しましたわ」

さっきの一夏達との会話でそうかな～と思っただけなんだが。

あとすずめの涙ほどって全然感心してないよな。

「まあ、いいですわ。このイギリス代表セシリア・オルコットが直々にあなたに質問するのですから、そのことをことを光栄に思いなさい。」

「そりゃあ、光栄だな」

「……ではまず一点目。あなたのような男がこの学園に来るは知らず、わたくしは情報部に掛け合ってみたところ轟　輝という人物はアメリカ合衆国でＩＳのテストパイロットをしていることが判明しました」

おお、大雑把ながら正解だ。

「そして報告されたことはたったそれだけでしたわ。『これ以上の

情報は渡すことができません』とこの代表候補生のわたくしすらそんな大雑把な情報しか手に入れられないほどのセキュリティーがなぜあなたには掛かっているのですか？」

「……」

「答えなさい」

威圧するようにオルコットさんは睨みつけてくる。だが返事は決まっていた。

「言いたくないな。」

「なっ！」

オルコットさんの顔が一気に赤くなる。まあ、こいつは

「答えられないというのですか！このイギリス代表のセリシア・オルコットの質問に！」

「ああ、答える筋合いはまったくない。まあ、どうしても知りたければ」

未だに顔を真っ赤にしているオルコットさんに向かって不敵に笑いながらこう言い放つ。

「実力で吐かせてみな。イギリス代表候補さん。」

「あっ、あっ、あなたねえ！このわたくしに対する決闘の申し込みですか！？」

「そうだ。ちなみにお前が勝ったら好きなだけ情報をくれてやる。しかし負けたらお前はオレに今後一切オレの事を調べるなよ」

「ずいぶんと余裕ですわね！いいでしょう！今日の放課後の織斑さんとの勝負が終わった後にでも……」

「いや、そいつは困るな。できれば今から三日後がいい」

「わかりましたわ！わたくしの優しさで試合を三日後にすることを許します。つまらない試合になると面白くありませんから、せいぜいこの三日間、わたくしに対して対抗策でも考えておきなさい。」

怒ったようにオルコットさんは来た道を戻っていく。

「やれやれ、演技をするのも大変だな。これでいいんだろ博士？」

これで目的の１つ目が達成できた。あとはその日を待つだけか…。

そして、１０分後…

「あと5分しかないのに教室がわからねえええええぇぇぇぇっ！！！！」

来た道をすっかり忘れた俺は校内中を疾走している。

「ねえねえキミ」

ふと階段で息を整えていると知らない女子がいた。

ってオレまだこの学園に入学して1日たっていないからほとんどわからない。

リボンの色が黄色（確かこれは2年生を意味する）で扇子を持っている。

「キミの教室はもう一つ上に上がり、左に曲がってしばらく行くと見えるはずだよ」

「本当ですか！」

ありがたい。どうやらオレは人に聞くという大切なことをすっかり忘れていたようだ。

「どうも助かります」

「うん、でも早くしないとまずいかな？」

キーンコーンカーンコーン

しまったあああああっっっ！！！ベルが鳴ったしまうとは！！！

「すいません今度お会いした時に必ず礼は！」

そう言ってオレは全力で静かにダッシュする。

「へえ、あの子が2人目の子なんだ」

クスクスと笑いながらＩＳ学園の生徒会長である更識楯無は扇子を開き、そこには『残念無念』と書かれていた。

「遅れてすいませんでしたあああぁぁぁ！」

バンとドアを開け山田先生を含むクラス中から注目を浴びるが問題ない。↑いや、大問題です。

織斑先生はまだ来ていないらしい。

助かったよ、千冬さんの厳しさは小さいころから知っているからな。

よし、オレも席に着席を……。

「ほう、一日目にして遅刻をするとはいい度胸だな」

ふと後ろから声がして振り向くとそこには黒い何かがオレの顔めがけて近づいている。

それが出席簿だとわかった瞬間にはのび太くんがジャイアンに顔面を殴られたかの如く、俺の顔面に出席簿がめり込んだレベルと間違えるぐらいの衝撃が来た。

第5話　前門に貴族、後門に侍、頭上の権力者（前書き）

すいません！
リアルの方が忙しくてなかなか書けずに一週間がたってしまいました。
せっかく更新が早いと感想をいただいたのに恥ずかしいばかりです。
あと第４話を多少直しました。

第5話　前門に貴族、後門に侍、頭上の権力者

第5話　前門に貴族、後門に侍、頭上の権力者

千冬さんの出席簿が顔にめり込み数時間後、放課後になりオレは第3アリーナのモニターが映る部屋で先に座っていた…というよりも

「ねえねえ、轟くん！一夏くんとどういう関係なの！」

「今日私達の部屋に来てもっとおしゃべりしようよ！」

「いったいどこ出身なの轟くんは？」

女子達に囲まれて質問攻めに遭っている…。

一夏と箒について行こうとしたんだがその前に昼休みの倍の女子に女子に囲まれ強制的に運ばれて、今にいたる。

そういえばオレもよく思えばアメリカにいた時も話しかけられたな…ただし研究所ではすれ違う人はこんなに多くなかったし、たいがいは女子に見間違えられていたけど……はっ、イカン。トラウマが軽く蘇るところだった。

モニターでは一夏はまだ出ていなく、オルコットさんは滞空している。

そして女子達の洪水のような質問が始まり数分後、バトルアリーナに一夏が入ってきて皆が注目する。

「織斑君勝てるかな～？」

「う～ん、オルコットさんの強さは確かに本物だもんね」

「でも、織斑君はあの織斑先生の弟なんだよ。もしかしたらなんとかしてくれるかも」

「私はオルコットさんに賭けるわ！」「ならわたしは織斑君に！」

女子達がそれぞれ思った事を口に出し、討論を始める。というか明らかに別のこと（賭け事）が混じっていなかったか？

そして試合が始まった。

オルコットさんのライフルが白式の左肩装甲を吹き飛ばし、それからオルコットさんの専用機『ブルー・ティアーズ』の兵装を生かした射撃の嵐が一夏を襲う。

「うわぁ…オルコットさん容赦ない…」

「織斑君も残念だったよね…。よりによって代表生候補に目を付けられるなんて」

一夏はその射撃を食らいながら、近接ブレードを展開し…って近接ブレード！？

「なんで近接ブレードを選ぶの！？」

「ここは射撃武器なのに…」

「もしかして間合いに入る戦法なのかな？」

例え隣の女子（ゴメン、名前が分からない）が言うとおり間合いに入る戦法だとしても相手は代表生候補なのだそう簡単に入れないと思うが…。

２７分後ー

一夏は満身創痍の状態で画面上に表示されているモニターにもＨＰをしめすエネルギーシールドの残量がごくわずかしかない。

対するオルコットさんは傷一つ付いていない。

なのにこんなに時間がかかっているのは、オルコットさんは一夏を遊んでいるためである。

「このままじゃあ一夏くんが…」

「やっぱり代表生候補にはさからえないのかなぁ……」

周りももう絶望的な感情をしており一夏が逆転するなど考えていないだろう。

（何故、他の武器を使わない…いや使えないまたは無いのか？）

普通ＩＳには初期装備と後付武装というものがあり、初期装備はＩＳの専用装備でその『初期装備』では死角になるものまたは使いやすいものを装備するために『後付装備』がある。

しかし一夏があの近接ブレードしか使えないとしたらそこから割り出させる仮説は『後付装備すらできないＩＳ』ということだが。

（いや、今はこの試合の結果を見るか）

モニターに再び目を戻すと今までの動きとは違う勝負を終わらせるのか『ブルー・ティアーズ』が搭載しているビット『ブルー・ティアーズ』が…なんだ、『ブルー・ティアーズ』の名前がかぶっているって？

そんなもん原作を読め、かなり面白いぞ。

さて、そのビット『ブルー・ティアーズ』（ややこしいから以下ビット）が一夏を襲う。

かろうじて防御、回避するがそこをオルコットさんのライフルが一夏に狙いを定めるが一夏は無理矢理加速し、体当たりをオルコットさんのライフルにして、狙いをずらす。

オルコットさんは一夏にビットを飛ばすと一夏は無数のレーザーを潜り抜け、１機のビットを切り裂く。

おっ、動きが変わったな。

一夏は何かつかんだようで次々とビットを切り裂いていき、ダメージを負っているのにもかかわらず動きもよくなっている。

「すごいすごいよ！！」

「かっこいい～！織斑く～ん！！」

いままでの展開を変えていく一夏の行動に周りの女子達が騒ぎ出す。

そうして、一夏がオルコットさんとの間合いを詰めようとした時に『ブルー・ティアーズ』の腰の突起が外れ一夏に向かって飛び…赤を超えた白い爆発と光が一夏を包む。

「「「……」」」

さっきまで勝てるかもしれなかった雰囲気が吹き飛び唖然する女子達。

しかしオレはその煙が晴れた時あることを確信し笑みを浮かべた。

「機体に救われたな一夏。なかなかの演出だな」

≪一夏ｓｉｄｅ≫

いままでウインドウに書かれていた『初期化』と『最適化』が終わった。

ＩＳ装甲はさっきまでと違い滑らかな曲線とシャープなラインが特徴的などこかの中世の鎧を思わせるデザインになった。

「ま、まさか……一次移行！？あ、あなたは今まで初期設定だけで戦っていたって言うの！？」

一次移行になったということはコイツはやっと俺専用の機体なった

ということだ。

そして何より今まで持っていたブレードはかつて千冬姉がふるっていたものと同系列の武器―近接特化ブレード≪雪片弐型≫があった。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

そして雪片弐型の刀身をセシリアに向けながら構える。

「俺も、オレの家族を守る。そして今はとりあえず千冬姉の名前を守るさ！」

「さっきからなにを言っているの……ああもう、面倒ですわ！」

セリシアは2機のビットを放ってくるが今の俺ならどうすればいいかわかる。

ビットをすれ違いざまに両断し、一気にセリシアと距離を詰めそして…

『試合終了。勝者―セリシア・オルコット』

……えっ？

何故か負けた。

試合終了後、千冬姉から盛大な皮肉をいただき、ついでに以前間違って捨ててしまったＩＳ起動におけるルールブックをいただいた。

公衆電話においてある電話帳に負けないぐらいの分厚さとページの薄さが特徴的だ。

「帰るぞ」

「一夏、あの負け方は…プッ」

出口で待っていてくれたのは俺の周りの優しさ欠乏病人物ナンバー2の箒と3年間も連絡をくれない無礼者　輝だった。

「……」

「な、なんだよ？」

となりを歩いている箒がじろじろと俺を見てくる。

「負け犬」

ぐあ。なんだこいつ。ただでさえ弱って死にかけている俺にさらに追い打ちをかけてくるとは閻魔大王さまだってしないぞ。いや、実際会ったことないから知らないけど。

「大見えを張った一夏は女子に敗北しましたと日記に書くから心配するな」

輝がそう言ってくるがまったくどこを心配すればいいんだ。お前の頭か？

2人とも俺の心配をしてくれずそのまま寮に向かうが途中、輝は俺達と違う道を歩き出した。

あまりの態度に泣くぞコラ。

「輝そっちは学生専用の寮じゃなく教師専用の寮だぞ」

「んっ？ああ、心配するな。オレは今こっちに住んでいるんだ」

「「はあっ？」」

箒と見事にかぶる。なに言っているんだこいつは？

「いや～、昨日ここに来たんだが生徒寮に泊まる部屋がなくてな、教師専用寮の一階の仮眠室を借りているんだ。じゃあな～♪」

そういって、輝は走って寮に続く道を曲がり角で見えなくなる。

オレは箒と共に寮に戻りながら話を続け、そして話の成り行きで箒が俺のＩＳの特訓に付き合ってくれることになった。

そういえば輝ってここにいるということはＩＳ扱えるんだよな？

そんなことニュースで一度も聞いていないんだけどな。

よし、今日部屋に呼び出してみるか。聞きそびれたこともいくつかあるし。

俺と箒は夕食を済ませたあと、輝を呼び出した。

そして部屋に入るなり一言目が…

「で、女子とどんなイチャイチャができた？」

なに言ってんだこいつ。

どうやら俺の親友はアメリカ人に影響されたらしい。いや、知らんけど。

バチーン

「ぐっ…」

「不謹慎だぞ」

『馬鹿な事を言うな』という眼付をしながらいつの間にか持っている竹刀で輝の頭を叩く箒。昔から輝は道場で箒に余計な事を言い叩かれている場面を何回も見ている。

いったい輝の脳細胞は箒のせいでいくつ滅んだんだろう。

「いってえなぁ…。箒こそなんだその胸は一夏を誘惑するために…」

「うあああああぁぁぁぁぁ！！！」

バシィンッ！

顔をいきなり赤く染めた箒が竹刀を振り、ものすごい音が。ってそれはやり過ぎだ！

見ると何か小さい声で言いかけた輝に箒の全力の一撃が後頭部を直撃し…。

「あぶねえな。箒。」

「……！」

直撃してなかった。輝は右腕で竹刀を受け止めていた。しかし驚いたことにＩＳを部分展開させ右腕だけ灰色の装甲に包まれていた。

「輝！お前、専用機持ちだったのか！」

常に身につけている待機状態のＩＳがなければこんなことはできない。ゆえに輝が専用機を所持していることになる。

「んっ、まあな。っておい箒。さっきは俺が悪かったから、竹刀を収めてくれよ」

「……」

無言で不機嫌そうに竹刀をしまう箒にＩＳの部分展開を解く輝。

「なんで、オレを呼び出したんだ？」

右腕をさすりながら輝は尋ねるが、コイツは絶対わかって言っている。

「輝わかって言っているだろ。昼休みに俺が聞きそびれたことだ」

つまり、輝がこの三年間どこにいたのかについてだ。そして輝の口から真実の言葉が…。

「う～ん、やっぱその話は無しっていう方向で」

でなかった。

≪輝ｓｉｄｅ≫

やっぱり駄目だな。

「なんでだ、輝！」

「いや、だめだ。政府に口封じされているんだ」

わかってくれよ箒も。もし誤って口を滑らしちゃうとオレは近い将来、アメリカにいる化け物教官とドックファイトの…いや、一方的な虐殺の標的になるんだよ。

「あの行方不明になった後、お前が何処で何をしていたかも話せないのか？」

「ああ、だめだ。」

一夏は納得いかなそうな顔をしているが仕方がない。

「この３年間、オレはアメリカにいてある経由を経てアメリカのＩＳ開発研究所のテストパイロットに登録されていることぐらいだな」

「テストパイロット？」

「ああ、ＩＳの試作機や実験機、新兵装の運用などを担当する人間のことだ」

最もオレの登録が公になったのは最近だけどな、と付け加えておく。

「なるほどな。ではお前はいつＩＳを使えるようになったのだ？そんなこと一つもニュースなどでは聞いてはいないが」

箒は相変わらず鋭いところを突いてくるよな。

「それについても秘密事項だ。箒。」

「むうっ…」

オレ自身このＩＳ学園に入学させることに上層部で数多くの議論が飛び交ったらしいからな。

「まあ、オレのＩＳは3日後にこうかいされるので楽しみに待っていてくれ」

「三日後？どういうことだ輝」

「ああ、オルコットさんと喧嘩することになったから」

「「はっ？」」

今日、二度目のシンクロをする一夏と箒。

なんだ、耳が悪いな二人とも…。

「もう一度言うぞ。３日後にＩＳを使った模擬戦をやることになった」

「なんで？」

「いや、オレの個人情報を聞き出そうとしたから聞き出したいのなら実力でどうぞといったらそうなった」

ほんと、英国人って怒りっぽいよな。…いや、関係ないか。

「お前って奴はなんでそうなるんだ」

「知らん。けどこうなった」

それから一夏や箒と小学校の頃の話に花を咲かせながら、門限の１５分前に一夏達の部屋を出ていった。

「ふうっ」

大浴場が使えないために（検討はしているのだがまだ使用許可が下りるのは当分先だろう…）樹民室に設置しているシャワーを浴び、明日の用意をし終え、バタッとベットに身を預ける。

ふとあることを思い出しオレはＩＳのコアネットワークの個人間秘匿通信（プライベートチャンネル）を使い、通信回線を開く。このＩＳ学園で生活するために上

層部から1週間の定期報告が義務づけられているためである。回線先は専用ＩＳを持っているアメリカにいたころＩＳについての全てを教えてくれた教官だ。

「こちらトイ・ボックス（玩具箱）。教官起きていますか？」

『むにゃ、むにゃ……すぴー……』

「……」

だめだこりゃあ。教官を無理やり起こすと大変なことになるのでオレは諦めた。進んで地雷を踏みたくはない。

「しかたがない明日にするか」

電気を消し、毛布をかぶり夢の世界に旅立つことにした。

2時間後

「ｚｚｚｚ……」

『元気ですかーーー！！！』

「うわあああぁぁぁぁっ！！」

な、なんだ、これは？人が夢の世界に旅立っている時に『元気ですかーーー！！！』はないだろう。心臓に悪すぎるぞ！

『うわっ…さすがに今のはこっちがびっくりしたわよ』

そりゃあこっちのセリフだ！ってこの声は…

「フィリシア博士ですか！？」

『はぁい、アキラ。そっちはどう？さっきあの子から報告を受けて私が代わりに通信回線を開いているんだけど、そっちはどう？』

「ノープログレムと言いたいところですが女子達の質問攻めでくたくたですよ」

『へぇー、大変そうね。それで報告書のデータは？』

「データを圧縮して今送りますよ」

『……受け取ったわ。じゃあ、睡眠を妨害して悪かったわね』

……オレが寝ていると知ってて通信をかけたな博士。

ドンドンドン！

『轟く～ん。大丈夫ですか～！今すごい悲鳴が聞こえたんですが～！』

ああ、山田先生まで迷惑をかけてしまった……。恨みますよ博士。

翌日、朝のＳＨＲ

「では、織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでいいですね！」
一夏がクラス代表に決定された。クラスの女子も騒いでいるので、俺も空気を読み一夏に盛大な拍手を送る。そして当の本人は表情が暗い。
「俺は何で負けたのにクラス代表になっているんですか！」
「それはわたくしが辞退したからですわ！」
一夏の問いに答えたのは先生ではなくオルコットさんだった。妙に昨日と比べて上機嫌だな。何があったんだ？
「まあ、私が勝って当然の試合でしたから仕方ありませんわ。そしてわたくしも大人げなく怒っていたことを反省したまして“一夏さん”にクラス代表を譲ることにしましたの」
“一夏さん”ね。まさかとは思うが…
「そ、それでですわね。わたくしのような優れた人間が個人的にＩＳを教えてあげれば、それはもうみるみるうちに急成長して……」
エレガントと華麗は特訓に関係ないような気もするけどな。
まあ、美人の方が訓練のやる気は出るってことなのか？
そう思っていると突然机をたたく音がし、見れば箒が立ち上がっていた。
「あいにくだが一夏の教官はもう必要ない。私が直接頼まれたのだ

からな。私はその義務を果たさなければならない」

殺気混じりのいつもより数倍も鋭い瞳でオルコットさんを睨みつける。しかしオルコットさんも正面から受け止め、視線を返す。

「あら、ランクCの篠ノ之さん。Aであるこのわたくしに何か？」

「ラ、ランクは関係ない！わたしは一夏と約束したのだからそれを裏切るわけにはいかんのだ！」

互いに一夏の訓練に付き合うために一歩も引かない。オルコットさんまで一夏の事が気になり始めたか。

こりゃあ大変だぞ一夏。

っておい鈍感王。他人事のように見ているんじゃない。

「騒ぐな、馬鹿ども。」

セシリアと箒の頭に出席簿アタックが炸裂し千冬さんは二人に低い声で告げ、二人ともすごすごと席に座った。

こうかはばつぐんだ！

一夏も得意げな顔をしていたため叩かれる。

どうせ千冬さんの凄味とすごすご帰るを掛けていたのだろう。表情がから読めるぞ一夏。

「さて、諸君。クラス代表は織斑一夏に決まったが、ここで副クラ

ス代表を決めたいと思う」

副クラス代表？なにそれ。

「副クラス代表とはクラス代表の補佐、即ち代表の手伝いや代表が会議などに出席できない時に代理として出る者のことを言う。まあ、あまり表に出ることはないので名前だけの役職だがな」

ざわざわとクラス中がざわつく。まあ、オレはそんなめんどくさいことはしたくないけどね。

「はい、轟くんを私は推薦します！」

轟か。クラスの中にもしかしたらオレ以外にもいるかもしれない。けど“くん”って…。

「私もそれに賛成です！」

まさか…。

「俺も輝を推薦します！」

一夏テメェ！なに『こうなったらお前も道連れだ』みたいな顔してんだよ！

「オレは辞退を『立候補された以上事態は許さん』クッ…」

完全に退路がふさがれた。第一回世界大会の覇者にしてクラス担任の織斑千冬にヒットラー並の権力を待たせた奴出てこい！

権力で生徒の自由を封じているぞ！

畜生めーーー！！！

おっP…さすがにこれは止めよう。

「では立候補者は轟　輝…他にはいないのか自薦他薦を問わないぞ」

「私が！」「このわたくしが！」

ああ、今まで黙ってくれていた二人がここにきて立候補するなんて。

二人は一夏と一緒にいることができると思ったのかすごい速さで立候補をした。

「篠ノ之にオルコットか…三人も立候補者が出るとはな」

黒板に二人の名前を継ぎ足していく。

いや、オレは立候補されたんですが、千冬さん…。

しかも箒にオルコットさんの二人は互いに睨みつけて『辞退しろ』という雰囲気になっている。

このままじゃあこの今にも目からプラズマ光線が出そうな視線がオレに向くのも時間の問題だ。

あんなもので睨みつけられたらオレ、目が焼けちゃうよ。

または全身が一瞬にしてまっくろくろすけになる自信がある。

そして、ＳＨＲを告げ終わり、背にそれぞれ竜と虎を従えた２人の修羅が近づいてくる。

「輝、すこし話がある」

「轟さん、ちょっとよろしいかしら？」

そして、オレは両肩を二人の修羅に掴まれて、すこしＯＨＡＮＡＳＩを強制的に申し込まれた。

そしてその結果。

次の日の新聞部のトップ

『決戦！？　轟　輝君　ＶＳ　セシリア・オルコット　＆　篠ノ之　箒

絶対に見逃せない戦い！２日後・放課後のアリーナで開始！』

第５話　前門に貴族、後門に侍、頭上の権力者（後書き）

これから更新がいくらか遅くなると思います。
それでも見てくれるとわたしはうれしいのですが
感想をできれば書いてくれるとさらに嬉しいですけど…
次はとうとう輝君のＩＳが登場です！次回もよろしくお願いします！

第6話　そして鷹は羽ばたく（前書き）

やっと投稿できました。

しかし半分が戦闘シーンって・・・・・・

近いうちに設定を設けたほうがいいのかな？

第6話　そして鷹は羽ばたく

ＩＳ学園の各クラスは最後の授業が終わり放課後に入ろうとしていた。

いつもなら部活に行く者、そのまま寮に帰る者、教室でまだ友達と喋る者など多彩に別れるが今日は違った。

クラスのほぼ全員がアリーナに向かい特等席を占領しようと走る者やゆっくり行く者などが見える。

何故なら、今日は２日前から全校中に広まっていたＩＳ学園２人目の男子の対決が見られるからである。

第三アリーナのゲート前でオレは軽いストレッチをしていた

「…１３、１４、１５！よし終了」

腕立て伏せの体勢から体を起こし体をほぐす。

「で、何か用ですか織斑先生」

「まあな。自分の生徒のここでの初陣ぐらいには付き合ってやってもいいかとな」

後ろを振り向くと千冬さんがいつものスーツ姿で腕組みをして立っている。

「オルコットさんはともかく箒の付き添いはいらないんですか？」
「篠ノ之には山田先生に行ってもらった。それと敵を心配するとはずいぶんと余裕だな」
「こんな1対2の状況を作り出した人がよく言えますね」
しかもこの試合はオルコットさんと約束した試合を含んでいるので負けることのできない試合になっている。
「お前達に任せるといつまでたっても決まりそうにないからシンプルに決めるようにしただけだ」
さて、オレがなぜ箒とオルコットさんに1対2の勝負になったかというとそれは3日後の放課後ことだ
ポワンポワンポワ～ン（回想中）
「この手の仕事は慣れているのでわたくしの方が一夏さんをサポートするのは相応しい出すわ！」
「私の方がアイツの事をよく知っているし、幼馴染であいつも何かと気が楽だろう！」
放課後の教室では未だに二人は言い争っており、オレは少し離れたところで教科書を開いて明日の予習をする。ちなみに一夏は山田先生に呼ばれこの場にはいない。
窓の外を見るとすでに夕焼けに染まりつつありカラスの群れが鳴い

ており、まるでこの光景を馬鹿にしているみたいだ。
朝のＳＨＲから休み時間の度に竜と虎の激突が始まり今も激しく口論している。
ちなみにオレは辞退する気でいるためにさっきその事を２人に告げるとさらに激しく口論し始めた。
「ああ、暇だな…」
３人の候補が出て、千冬さんは『３人とも職員室に来て誰がすることになったかを報告しろ』と言ってきたので一人で帰るわけのも行かない。
いつもなら女子の襲撃が来るのだがこの２人の雰囲気のせいで今日は教室がガラガラだ。
よって教室には２人の言い争いの声しか響かない。
（誰かこの状況を打破してくれ！）
オレがそう願った瞬間、教室の入口のドアが開いた。
おお、神様ありがとう！一夏がやっと…
「お前達はまだ決まらないのか」
訂正。どうやらオレの願いは神ではなく閻魔大王に受信されてしまったようだ。
「お、織斑先生！？」

「何でこちらに」

「貴様らがいくらなんでも遅すぎるから様子を見に来ただけだが…」

そして千冬さんの視点で言うと教室にはさっきまで口論していた2人の女子と離れた場所で頬杖をついてこっちを見る男子一人がいる。

あれ。オレやばくね？

「なにをしている轟」

いつもとは比較ならないぐらい物凄い低い声でオレに問いかけてくる。

ダラダラと無意識に冷や汗が流れ、生きた心地が全くしない。

「いや、あのですね。オレのような入学2日目の人間がやるよりやる気がかなりある二人には負けまして、いささか恥ずかしく思い…」

もうなに言ってんのか自分でもわからなくなっている。

しかし言い終わった瞬間に自分の待っているであろう運命から少しでも逃げるため無駄なあがきを続ける。

「そうか…」

えっ？わかったのオレってスゲーな。あの千冬さんを…

「篠ノ之、オルコット。お前達はこれより3日後に試合を行っても

らう。内容は轟輝を倒すことで先にとどめを刺した方が副クラス代表をやってもらう。いいな」

まてええええぇぇぇぇっ！！！

「ちょっと千冬さ…」

バゴッ！

オレの額に千冬さんが投擲したボールペンが直撃する。

すげえ痛い（泣）

「織斑先生…それはオレにとって不公平かと…それに2人の承認は」

「「それでお願いします！」」

ええええええぇぇぇぇっ！！！

「篠ノ之さん、勝負はもう見えて当然なのでは。恥をかく前に辞退したらどうですか？」

「ふん、舐めるな。お前こそ私に負けても文句は言うなよ」

二人はすでにやる気が満々のようだ。

「では三日後の放課後に試合をするぞ」

この人の皮をかぶった悪魔め！

≪回想終了≫

「まあ。２人に負けた場合はアメリカの手により揉み消されるからせいぜいがんばれよ」

ぶっちゃけ負けられない戦いなのにそんなテキトーに応援する教師って…。

（まあ。千冬さんらしいけどな）

「さてそろそろ時間だぞ行ってこい」

「了解しました“白騎士”どの」

「貴様こそアイツに恥をかかすなよ“一匹狼（ローンウルフ）”」

その名前で呼ばれるのは正直好きじゃないんですけど。まあお互い様か。

千冬さんは部屋を出ていき、オレは第三アリーナ・Ｂビットのゲートの方向に向く。

胸の中央辺りから出てくる光が全身を包み、瞬時に装甲が形成される。

灰色でカラーリングされた装甲が全身に展開され、背中には他のＩＳには見られない４連装ガトリング砲が複合されている大きな二枚の推進翼と４枚の多方向加速推進翼がマウントされ、小型の推進翼≪バック・ドラフト≫が肩部に１組、脚部に２組設置されている。

次に意識を集中させ左右の手に武器を展開させる。
左手には大きめの銃剣を装着している五十一口径アサルトライフル≪サーペント？≫
右手にはくの字に折り曲がっている２ｍほどの機体と同じ灰色に染められている大型ブーメランブレード≪ハード・エッジ≫
「行くぞアクティブ・ホーク」
オレの専用ＩＳである第三世代ＩＳアクティブ・ホークを前進させゲートを飛び出す。
向こうのゲートから同時に『ブルー・ティアーズ』を装備し、六七口径特殊レーザーライフルを持っているオルコットさんが滞空していて何故か驚いていた。
「ア、アクティブ・ホークですって！？」
何で驚いているんだろうか？
「ちょっとあなた！いったいどういうことですの」
「何を驚いているんだよ」
「惚けないでくださいませんか。そのＩＳはあのフィリシア・エンドレイ博士がつい最近発表したＩＳであなたみたいな人が使っているから驚いて当然ですわ！」

フィリシア・エンドレイ博士

オレはフィリシア博士と呼んでいるが博士は世界屈指のＩＳの機体開発者であり、ＩＳの生みの親で箒の姉である篠ノ之束さんに引けを取らない技術を持っていると称されている開発者だ。そのため世界中から注目され、彼女が発表するＩＳは毎回注目され続けている。

以上、インターネットを通じて第三者の視点から解説したオレより

「しかもそのＩＳは確かアメリカの代表候補生がテストパイロットに選ばれていたはずですわ。なぜあなたがその機体を運用しているのかしら？」

「別にいいだろ。本人の許可はもらっている」

「本人からですって！フィリシア・エンドレイ博士の関係者だったなんて。ますます胡散臭さが増してきましたわね…」

ぶつぶつ何か言っているが気にはしない。それより箒はどうしたのだろうか？

どう思っていた時、向こうのゲートから『打鉄』を装備し、刀型近接ブレードを握っている箒が出てくる。

打鉄は国産型ＩＳで戦国時代の鎧のようなデザインだが箒のような外人が思い浮かべる典型的な日本人が装備するとものすごく似合っている。

箒は少々戸惑っていながら進んでいるように見える。

大丈夫なのか？あいつ

「箒、お前ちゃんと戦闘できるのか…」

「馬鹿にするでない！」

どうやらオレがかすかに漏らした音声はＩＳのハイパーセンサーが箒の耳に届けたらしい。

「あら、篠ノ之さん。別に後方で休んでもらってもかまいませんわよ？」

「おまえこそ近づかれて泣き事を言わないことだな！」

「なんですって！練習機でまともにＩＳの戦闘すら行ったことがありませんのに！」

「なんだと！」

もうこの二人は連携する気はないようだ。まあ、目的が一緒の同士でもあり、恋敵でもあるからなしょうがないか…。

ＩＳの戦闘ルールは先にシールドエネルギー（これはＩＳのＨＰみたいなもの）を０にした方が勝ちだ。

そしてスタートを告げる鐘はアリーナに響き渡った。

「いきますわ！」

オルコットさんはスターライトｍｋ？の初段を装填するし発射態勢

に移行し、箒は実体剣を構え突撃の体制になる。

オレはそれをハイパーセンサーの情報からそれを読み取り、腰部の兵装ラックからグレネード弾を素早く投げつけ、オルコットの発砲と同時にアサルトライフルでグレネード弾を撃ち抜き、ブーメランブレードのハード・エッジを盾代わりに防御態勢を取る。

バゴンーッ！！ガンッ！

グレネード弾の爆音と同時にハード・エッジに被弾するもダメージはない。

グレネードが爆発したことによって発生したエネルギーの塊を通過したレーザーは威力を削ぎ落とされ、刀身が肉厚なハード・エッジで防ぎきった。

爆音と共に黒い煙幕が発生し、オレの全身を包みこみ静かに暗い煙幕から獲物を見る。

「まったく、この距離でグレネードを投擲するなんて猿以下の知能かしら？」

「ふん。撃墜されたわけではなかろう、油断するなよ」

オレは煙幕の中でハイパーセンサーの情報を元に、オルコットに注意促すを箒に向かって体を捩じりおもいっきりハード・エッジを投擲する。

「なっ！」

驚きの声を上げた箒と同時にすぐさま煙幕から飛び出し、背部スラスターを全開にし、箒に接近する。

「させませんわ！」

オルコットはピッドを腰から分離させ、手を振りかざすとピッドが一斉に多角的直線移動ようはジグザグに接近してくる。

箒もハード・エッジを避け、遅れて接近してくる。

先行したピッドは上下に分かれ挟み撃ちを狙い、残りのピッドもこちらの周囲を狙ってくる。

おそらく一夏と同じようにレーザーの嵐に閉じ込めるつもりなんだろう。

オレはあらかじめエネルギーを蓄えていた肩部と脚部に設置されている小型推進翼≪バック・ドラフト≫を起動させる。

瞬間爆発炎上現象の名前を持つ小型スラスターはＩＳの技能の一つ『瞬間加速』にも匹敵するぐらいの加速力を吐き出し、次の瞬間に今までとは比べ物にならないスピードになる。

そのスピードは一瞬の内にブルー・ティアーズによるレーザー地帯を越え、箒の頭上に躍り出ると同時に旋回して戻ってきたハード・エッジをキャッチし箒に向かって斬り込む。

箒も実体剣でそれを受け止め互いに鍔競り合いに持ち込むが考えが浅はかだ。

オレは空いている左手の五十一口径アサルトライフル≪サーペント？≫の銃口を箒に向ける。

ハッ！と箒は気づくがもう遅い。

バババンッ！

「ぐああっ！」

三連射で吐き出されたサーペント？の零距離バースト射撃が『打鉄』のシールドエネルギーをかなり削り、『打鉄』の左肩装甲の半分を吹き飛ばす。

本来ならバースト射撃によるバリア貫通での絶対防御の発動を狙っていたが箒がギリギリのところで身を捻り直撃を回避した。

絶対防御とはすべてのＩＳについている操縦者が死なないようにあらゆる攻撃を受け止める機能だがそれはシールドエネルギーを激しく消耗するためこれを発動させればグッと有利になる。

「もう一撃！」

「篠ノ之さん！巻き込まれたくなかったら離れなさい！」

箒が後退し、俺も距離を離すまいとするが箒との間に牽制用のレーザーが２本打ちこまれ距離を離さる。

「やるなオルコットさん」

オルコットさんは次々とピッドからレーザーを嵐のように撃ち込ん

で来るがそれをかわしていく。
あいにくと手数での勝負は教官から嫌というほど叩きこまれたのでこういう回避には慣れている。
「箒はもういいな。まずはピッドを片付けるか。」
一機のビットに向かってハード・エッジを投擲するも簡単に避けられるがそれも計算の内。
脚部のバック・ドラフトの噴出跳躍で一瞬にして空中のビットを通り抜け、すれ違いざまにサーペント？の銃剣を一閃させる。
「まずは一機目」
両断されたピッドが切り口から紫電を放ち遅れて爆発すると同時に旋回してきたハード・エッジをキャッチする。
オルコットがこちらにライフルを向け発砲してくるが６枚の背部スラスターを使った多角的機動で避け、ピッドの猛攻をかわし続けながらサーペント？で牽制をする。後ろに回り込んできたピッドをすかさず背部のガトリング砲を起動させ、蜂の巣にする。
「くっ、デタラメな動きですわね！」
「そりゃあ、ＡＣＴＩＶＥ・ＨＡＷＫ（活発的な鷹）だからな！」
オルコットのピッドの残りが４機で箒も満身創痍だ。
オレはレーザーをかすったもののシールドエネルギーは削られてい

ない。

「まだだ！私はまだ戦えるぞ！！」

ふと下を見ると箒が実体剣を構えこちらに向かって飛んでくる。

「来るのか箒」

「でりゃぁっ！」

ガキィンッ！

箒の実体剣をオレのハード・エッジで受け止め、左手のサーペント？の銃剣を振り落とすと箒もあらかじめ展開していた小太刀でそれを受け流す。

（やはり刀での戦闘は箒の方が一枚上手か）

瞬時に背部スラスターの逆噴出で間合いを開け、サーペント？のフルオート射撃を食らわし次々と箒のシールド・エネルギーを削っていく。

「わたくしをお忘れなくてよ！」

セシリアのスターライトｍｋ？から超高速の弾丸が発射されるがそれを避けつつグレネード弾を投げつける。

「そんなもの！」

セシリアはピッドでそれを撃ち抜くがそれがまずかった。

「なっ！」「なんだこれは！」

グレネード弾は爆風ではなく白い煙幕を吐き出し瞬時にフィールドを包む。

「なんだこれはハイパーセンサーが！」

「くっ、やられましたわ…」

「ええええっ！ジャムグレネードなんて使うなんて」

ピッドでリアルタイムモニターを見ていた山田真耶は少々驚きながら画面を見ていた。

画面にはただ白い煙が画面を覆っていた。

「まったくこの場でそいつを使うか？」

隣に立っていた織斑千冬は呆れ気味に溜息を吐いた。

「ジャムグレネードはＩＳのハイパーセンサーの視覚とレーダー能力を低下させることができますけど、それは自分にも同じことが言えるのであまり使われないシロモノなんですけど」

「まあ普通はな。あの機体は例外だがな」

「えっ？それはどういう…」

モニターの画面には白い煙幕がいち早く晴れた場所に獲物を仕留めた大鷹が立っていた。

白い煙幕に包まれたオレは通常では装備されていないハイパーセンサー内のサーモグラフィックで箒とオルコットさんの大まかな位置はわかっていた。

されに近づけばこのＩＳのハイパーセンサー他のＩＳより優れているので完全に捕捉できる。

さて狩るか…

正面に箒を捕らえたオレはハード・エッジを投擲しその後ろにつく。

「そこか！」

ジャムではごまかせないハイパーセンサーの大気の流れを読み切った箒が構えているのだろう。

しかし、オレはホーク・シリーズの特徴の一つである極静穏機動に切り替えブーメランブレードを乗り越える。

箒はてっきりオレが来ると思っていたようだがハード・エッジがいきなり現れてかろうじて防御するも体勢を崩す。

「ま、普通は驚くよな。センサーに捕らえたと思ったらいないからな」

「えっ？」

突然後ろから声をかけられて箒はこちらを向くがそれとオレは同時に銃剣を一閃させシールドエネルギーを０にする。

「そんな…」

「諦めてくれ箒」

オレはあの時、箒の頭上を越え背後に回っていた。本来ならジャムでもごまかせない大気の動きでばれるがそれをホーク・シリーズの特殊機動・超静穏機動により音響や振動面の隠密性を極限まで下げることができるので第２世代の練習機のハイパーセンサーぐらいでは捉えることはできない。

（ま、もっとも第三世代相手じゃ…）

キュインッ！

と思っていた所にいきなり狙撃が繰り出されていた。

「ちっ、第三世代の狙撃機はセンサーの精度がいいな」

未だかすかにジャムの影響が残っているのか着弾点は少しずれているのものおそらくこちらを捕えている。

そしてジャムスモークの煙幕が完全に消えたとこれにピッドが飛んでくる。

「もう許しませんわ！」

ブルーティアーズのピッドからレーザーが発射されると同時にオレは回避行動に移る。

「しょうがないな。コレを使うか」

もうこの戦いを終わらせる。

オレはサーペント？を放り投げ、ハード・エッジを正面に盾のように構える。

未だ距離があるが瞬時加速（イグニッション・ブースト）を使えば問題ない。

瞬時に急激な加速をし、オルコットさんに急接近する。

オルコットさんはスターライトｍｋ？を撃ってくるもそれをハード・エッジで受け止めたあとにそれを手放す。

「武器を手放すなんて三流のすることですわよ！」

「悪いな。まだこいつがあるんでな！」

オレは後ろに手を伸ばし背部ユニットを大きな二枚の推進翼の隠されている柄を握り、背部ユニットから分離させる。

ガシャンと音を立て瞬時に変形し、今まで推進翼だったものが巨大な剣になった。

「！？」

「これで終わりだぁっ！」

振り下ろした一撃がまとも直撃し絶対防御を発動させエネルギーシールドを一気に持って行く。

姿勢を崩したところに刀身を変形させ二又の剣の形になりその間から露出するガトリング砲でエネルギーの残量を０まで持っていった。

『試合終了。勝者―轟輝』

「というわけでっ！織斑くんクラス代表決定おめでとう！」

「そして轟くんＩＳ学園にようこそ！そして副クラス代表おめでとう！」

ぱん、ぱんぱーん。寮の食堂にいくつものクラッカーが乱射される。

はぁ。祝ってくれるのは嬉しいが明らかに貧乏くじを引いたので素直に喜べない。

ちらりと横を見ると一夏の奴も同じような顔つきだった。

「「……」」

クラスの一組のメンバーが揃いわいわい騒ぐ中で俺達は沈黙し続けている。

というかクラスメイトじゃない奴がチラホラいるようなんだが？

「ふん、よかったな輝」

「ええ、本当におめでとうございます轟さん」

すごい嫌味を隣で言ってくる箒とオルコットさん。

このままではこの2人とはうまくクラスメイトとして付き合いに支障がでそうなんですけど。

「なんだ2人ともそんなに一夏の隣が…」

ガンッ！×2

二人のシンクロしたマッハストレートパンチが右頬を捉える。

試合の時にそこまでのコンビネーションでやればオレは落とされていたに違いない。

「はいはいは～い、新聞部で～す。話題沸騰中の新入生、織斑一夏君と轟輝君に突撃特別インタビューをしに来ました～！」

オ～と盛り上がる食堂にいる女子達。

「ではズバリ織斑くん！クラス代表になった感想をどうぞ！」

「えーと、まあなんというか、がんばります。」

うわっ！つまらねえ

「ではでは轟くんどうぞ」

「それでは以下同文で」

「うわっ！つまらねえ」

「心で思っても口に出すんじゃねえ一夏！」

そのあとは写真撮影がありオレと一夏のツーショットを求められたがセリシアにその役を譲ってやったら一部の女子が残念そうにしていた。

オレはそっちの気（ＢＬ）には興味はないぞ！

「もう寝るんだい…」

『織斑一夏クラス代表決定＆轟輝歓迎＆副クラス代表決定パーティー』は十時過ぎまで続きその間は女子のパワフルな行動力にオレ達は身体的にも精神的にも疲れ果てていた。

仮眠室のベットに倒れ込みそのまま夢の世界に旅立つ。

「だいいちだんかい…しゅう……りょ……ＺＺｚｚｚ」

その日の夢は覚えていなかったが何か懐かしい感じがした。

第6話　そして鷹は羽ばたく（後書き）

さて、次はとうとうツンデレラ3人目の登場です。

その前にがんばって書かなければ・・・遅れすぎだな

友達はがんばっているのに情けないな

第7話　さらに転校生が…ってソイツ知ってるよ！（前書き）

せっかく描いたネタの七割を結局使わなかったから、更新が遅れる。
しかもさらに最初の方で矛盾が生じたから書き直していくとさらに遅れる。
ＰＶ１５０００まだあとちょっと　でも続きを書く時間がない。
という一カ月を過ぎようやく出せました。ええ、正直情けないです。
スピードは二次創作で重要なのに・・・。

第７話　さらに転校生が…ってソイツ知ってるよ！

春の到来を思わせる桜の花が散り始める四月の下旬。
肌寒い天気からぽかぽかする眠気を誘う温度になり始めて、俺はこのＩＳ学園に来て数週間が経とうとしていた。

「だから、何であそこで激突するんだお前は」

「仕方がないだろ。俺だってやりたくてやったんじゃねえ」

今日はＩＳの基本的な飛行操縦の実践を教官役の千冬さんの授業で行い、専用機持ちのオレと一夏とオルコットさんが呼ばれ、地上からの急上昇を行い滞空し、千冬さんに『急降下と地表から１０？で完全停止』を命じられ、オレとオルコットさんは難なくクリアしたがまだ慣れていない一夏は地面と激突してしまいグラウンドにプチクレーターを作ったｗｗｗ。

まあ、箒に指導してもらったがその指導の仕方というのが『ぐっ、とする感じだ』『どんっ、という感じだ』『ずがーん、という具合だ』などだ。

ぶちゃけ一夏がわからないというのも無理はない。

しかし、そういう説明の仕方をする箒もやはり姉の束さんの妹だということがよくわかる。
あの人もたまに普通の思考では理解できない説明をしてくれる。

ってさすがにそれとこれは違うか。

授業は終了して一夏はこの穴を片付けるように命じられ、オレも男と言う理由で手伝うように命じられ、“オレは関係ない！理不尽だ！！”と思いながらも千冬さんの命令には逆らえないので一夏と共にとぼとぼ体力仕事に取り掛かる。

オレが土を運び、一夏がシャベルで穴を埋めていき、しばらくしてようやく穴は完全にふさがった。

「まったく、おかげで余計な汗を掻いちまった。今度ジュースおごれよ一夏」

「わかってるよ、何か奢るからさ」

一夏と共に更衣室へ向かいＩＳスーツを脱ぎながら会話を続けていく。

「まったくこういう時には風呂に入りたいぜ」

「同感だ、一夏。まだ春だからいいけどさ、夏になるまで使用許可が下りてくれないと泣くぞオレ」

「俺もだよ、いつになったら使わせてくれるんだろうな」

待てよ…学校の風呂がだめなら…オレの脳裏にある単語が出てきたそれは今この欲望を満たしてくれるものだった！

「一夏……いつか銭湯にいくぞ」

「銭湯……おおぉぉおおっ！！その手があったか！」

「そうだ！学校の風呂がだめなら外に出て銭湯または健康ランドでもいって温泉に入るぞ！」

「すばらしいよ輝君！是非その計画を実行しよう！！！」

「任せたまえ一夏君！私もやる気満々なのだよ！！！」

「「ははははは！！！！」」

ああ、なんてすばらしい計画なんだろう！これは至急案を練らなければ！！

着替えが終わりようもない更衣室の中で風呂に入りたいという夢をかなえる計画が出て変なテンションで笑い声を上げる2人の少年がいた。

風呂に入れることに舞い上がった後、更衣室を出て一夏と別れ校舎の廊下を歩くとすれ違った女子達が声をかけてくる。

「輝君だ！今日もかっこよかったよ！」

「んっ、ありがとうな」

「あきらく～ん、今度私達でやるお茶会に参加してね～！」

「ああ、今度暇ができたら参加するよ」

「今日は食堂にいつ来るの！？」

「う～ん、今日はちょっといつもより遅くなるかな？」

一人一人に返事をしながら寮に向かっていくが声をかけられる数が半端じゃない。

以前なんか返事をするため立ち止まった瞬間に一斉に女子に囲まれ、ド〇クエの勇者達がモンスターに周りを囲まれている状況を体験できた。

この頃は以前と違ってだいぶ落ち着いたので結構助かっている。うん、いいことだ。

「確か一夏の特訓の当番は今日は箒か」

結局、一夏のＩＳの特訓はオレと箒とオルコットさんで一夏の面倒を見ることになり、日替わりで担当を変えている。

しかし担当じゃない人も見学は可能なので箒とオルコットはほぼ毎日特訓に付き添い、よく互いがアドバイスのことで言い争い一触即発の空気になりかける。

たまに一夏が空気の読めないことを言い、かってに地雷を踏むけどな。

食堂で就職を食べ終え、教師専用寮の仮眠室へ戻りベットに腰をかけ定期報告するためにＩＳ≪アクティブ・ホーク≫の通信回線を開く。

さて今日はちゃんと起きているかな教官。

「こちらトイ・ボックス。教官起きていますか？」

『起きているよ…アキラ…』

おお、よかった。今日はちゃんと起きていた。

『…えーと、定期報告？』

「はいそうです。今報告書のデータを送ります。」

『受信完了……ねえ、アキラ…そっちではうまくやっている…？』

「ええ教官。問題ありません」

『そうならよか『そこ！』しつこいな…』

ドンッ！ドンッ！バゴーン！

何故か通信の向こうから聞きなれた音がしている。

「……あの教官？さっきから銃声が混じっているんせすけど？」

『うん……今試合中……』

へえ、試合中ね……Ｗｈａｔ？

「ちょっと、どういうことですか！」

何でこの人試合中に通信許可してんの！？

いや、確かに知らずにかけた俺も悪いかもしれないけど試合中に回線を開くこの人は相変わらず意図がつかめない

『……大丈夫…試作運用を兼ねた試合だから……今、試合中断させた……』

なんだ、研究所内の演習区での運用試験か。

例の兵装の試験運用だろうか？オレもアレを使ってみたが完全にあれは玄人向きだ。

「なるほど、で相手は誰ですか？教官の相手ぐらいになるとテストパイロットではオレを除いてローウェルさんぐらいしか勤まらないと思いますけど？」

『……それは《やっほー！！アキラ！元気にしてた～？》』

教官との通信回線に急に明るい声が割り込んできた。

オレの脳裏に研究所のテストパイロットの一人で金髪のポニーテールが印象的な女性が思い浮かんだ。

「ええ、元気にしてますよ、ローウェルさん」

《も～、お姉さんにもたまには声を聞かせてよ！暇なときでもいいからさ！》

相変わらずテンションの高い人だな。

「わかりました。今度からできる限りそうします」

《わ～い！》

「……エレナ？……ちょっと本気を出すよ？…」

子供のような喜びを上げたローウェルさんにいきなり低い声で教官が通信に割り込む。

（そういえば何故か教官はよく俺と話している時に話を遮られると怒る人間だったな）

『《ひいっ、か、勘弁してください！！教官が本気出したら私なんて一》さよなら』

バゴーン！！！

『ぎゃあぁあああぁ！！訓練用リミッター外さないでくださいぃぃぃぃぃぃ！！！』

通信回線の向こうから何発もの銃声とそれが聞こえたすぐ後に悲鳴が耳に入ってくる。

ローウェルさん頑張って生き延びてくれ。

ただオレはそう願うことしかできなかった。

～5分後～

『……おまたせ…アキラ』「あの教官…ローウェルさんは？」

『…今、担架で運ばれた……』

合掌…無事であることをお祈りしますローウェルさん。
それにしても向こうもＩＳを装着しているはずなのに気絶させるとは…新兵装の威力は折り紙つきだな。

《アキラ、報告書ご苦労さん》

「は、博士！？」

《アキラ坊、久しぶりだね》

《わたしらもいるぜ、アキラ！》

《アキラさん、そっちでのお話を聞かせてください》

《私達も》《いるのです！！》

おいおい、研究所のほとんどのメンバーの声が聞こえてくる。
ずいぶんと懐かしいな。

これもこっちに来たせいで向こうでは毎日聞いていた声がこんなにも懐かしく感じられるなんてこっちにくる前は思ってもいなかったな。

『…アキラ、そういうことだから……』

《今日はじっくりと談話でもしましょう》

通信の向こうでわいわいと他の人間も騒いでいる。

「わかりましたよ、今日は久々にオレの語り手で話しましょう」

学園生活のことについて喋っていき、研究所のメンバーに質問をされながら楽しい談話の時間を過ごして終わるころには明日になろうとしていた。

その日の夜。

「ふ～ん、ここがそうなんだ……」

ＩＳ学園の正面ゲートに、小柄な体に不釣り合いなポストンバックを持った少女が立っていた。

「え～と、受け付けってどこにあるんだっけ」

上着のポケットからくしゃくしゃになった紙を取り出すも総本校舎一階合事務受付という文字だけで地図もないので場所が分からない

「あー、もう！自分で探せばいいんでしょ、探せばさぁ」

ぶつくさ言いながらその足はとにかく動いている。思考より行動。そういう少女なのだ。

この少女は日本人ではないが日本は少女にとって第二の故郷であり、思い出の地であり、因縁の所でもある。『人に歴史有り』とはよく言ったものである。

―ったく、出迎えがないと聞いていたけど。ちょっと不親切すぎるんじゃない？政府の連中にしたって―

ぶつぶつ不満を言いながら歩き続け、人影を探すものの八時過ぎの校舎はどこも灯りが落ちており、人影一つ見当たらない。

（あーもー、面倒くさいなー。空飛んで探そうかな……）

それは名案と思ったが、アホみたいな学園内重要規約書の内容を思い出して止めた。

まだ編入手続きも終わっていない状況下でそんなことをすれば、事であり、最悪の場合外交問題まで発展してしまう。それだけは本当に止めてくれと何度も懇願した政府高官の情けない顔を思い出して、少女の気分はちょっと晴れた。

（ふっふっーん。まあねー。わたしは重要人物だもんねー。自重しないとねー。）

正直言って自分よりはるかに年上の大人がへこへこ頭を下げるのは、ちょっと気分がいい。

昔から『年を取っているだけで偉そうにしている大人』と『男っていうだけで偉そうにしている子供』が大嫌いな子供だった。

―でも、アイツらは違ったなぁ

とある2人の男子を思い出す。そして一人の女の子。けれどその内の2人は……

（だめ！もうあの事を思い出すのはなしよ！）

無理やり頭を振ってそれを振り切ろうとする少女だが幸運なことが起き、そのことは頭から離れる。

「だから…でだな…」

ふと、声が聞こえる。視線をやると、女子の一人がＩＳ訓練施設から出てくるようだった。

どこの国でもＩＳ関係の施設は似たような形をしているからすぐにそうだとわかった。

―ちょうどいいや。場所聞こっと。

声をかけようとして、少女は小走りにアリーナ・ゲートへ向かう

「だから、そのイメージがわからないんだよ」

不意を突かれて、少女の体はビクンと震えた。

男の声。それも知っている声にすごく似ていた。いや、おそらくはこの国に来る理由の一つになっている。

予想しなかった再開に、少女の鼓動は急ピッチでペースが上がっていく。

―あたしだってわかるかな。わかるよね。一年ちょっと会わなかっただけだし。

そう自分に言い聞かせる。けれどもし自分だとわからなかったらど

うしようという不安に駆られる。

―大丈夫。大丈夫！それにわからなかったら、あたしが美人になったからだし！

超ポジティブ思考にスイッチを入れて、少女は再び歩み出す。

「いち…『一夏、わたしがあれほど教えてやったのにもかかわらずなぜ今日はあんな失敗をしたのだ？』」

小さく呟いた少女の声は１人の女子によってかき消された

「あのなあ、いくら俺でも失敗はするんだよ。」

「ふん、男たるもの言い訳とは女々しいぞ」

「だからな輝に―って、おい、待てって箒」

すたすたと足を速めていく女子を追いかける男子

―誰？あの女の子。何で親しそうなの？っていうかなんで名前で呼んでんの

さっきまでの胸の高鳴りは嘘のように消え、ひどく冷たい感情といらだちが流れ込んでくる。それゆえ一夏が言ったある単語は彼女の耳に届いていなかった。

それからすぐに受け付けは見つかった。

「それじゃあ、手続きは以上で終わりです。ＩＳ学園へようこそ、

凰鈴音さん。」

愛想よく言う言葉もどこかとうく似合って意識に届かない。鈴音は口を尖らせてながら事務員に訪ねた。

「あの織斑一夏って、何組ですか？」

「ああ、噂の子？一組よ。凰さんは二組だから、お隣ね。そうそうあの子一組のクラス代表になったんですって。やっぱり織斑先生の弟さん名だけあるわね。それにあなたよりちょっと前に―」

「すいません、二組のクラス代表って、もう決まっていますか？」

「え…？え、ええ。もう決まっているわよ」

「名前は？」

「え？ええと、聞いてどうするの？」

鈴音の態度に少しおかしなところを感じたのか、事務員は少し戸惑ったように聞き返す。

「お願いをしようかと思って。代表、あたしに譲ってって―」

にっこりとした笑顔は全然笑ってなく、ばっちりと青筋を立てていた。

「織斑くん、轟くん、おはよー！。ねえ、転校生の噂を聞いた？」

朝。自分の席に座っている一夏と話していたらクラスメイトに話しかけられた。

「転校生？今の時期に？」

「ふ～ん、珍しいな」

今はまだ四月でこの時期に転入というのは本当に珍しい。
しかもここＩＳ学園の転入はかなり条件が厳しかったはずだ。来れる条件に当てはまる人間は国の援助をバックにつけているほどぐらいだろう。

そうなるとオレの脳裏にある単語が浮かんだ。

「もしかして代表候補生なのか？」

「せいか～い。なんでも中国の代表候補生らしいよ」

中国からの代表候補生か。いったいどんな奴なんだろうな？

「あら、わたくしの存在を今さらながらに危ぶんでの転入かしら」

そう発言するのは同じクラスのイギリス代表候補生のセリシア・オルコットさんで腰に手をあてたポーズがよく似合っている。

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？騒ぐほどのことではあるまい」

一夏の側にはちゃっかり移動してきた篠ノ之箒が立っている。

ついさっきまで自分の席にいたのにいつの間にか横にいるとは侮れんな。

「どんなやつだなんだろうな」

「む…気になるのか？」

「ん？…ああ、少しは」

「ふん…」

一夏の呟きを聞き、その答えにすこし不機嫌になる箒。

一夏お前って奴は本当に…はぁ、もういいか。

「まあそれはともかく来月にはクラス対抗戦があるからそれに向けて頑張れよ」

「轟さんの言う通りですわ、一夏さん。クラス対抗戦に向けてより実践的な訓練をこのわたくしが直々に教えてさしあげますわ」

「まあそうなんだけどさ。あ、輝今日はよろしく頼むぜ」

「「「……」」」

おい、一夏。お前は自分の周りの状況を理解出来ているのか！？
いや、できてないだろうな。それでもお前がそんなこと言ったからすげえ睨まれているんですけど！

「ま、まあ、それはともかくとしてクラス対抗戦に向けて頑張れよ一夏！」

「そうだ一夏、今は他の女子に気にしている余裕などなかろう」

「そうですわ一夏さん。クラス代表戦に向けて、より実戦的な訓練をしましょう！心配いりませんはこのわたくし、セリシア・オルコットが完璧に指導してあげますわ。」

完璧っていう言葉はあまり使うもんじゃないぞオルコットさん。

クラス対抗戦。それは読んでそのまま、クラス代表同士によるリーグマッチで本格的なＩＳの学習が始まる前のスタート地点での実力指標を作るためらしい。

またクラス単位での交流及び団結力の強化のためでもあり一位のクラスには優勝賞品と半年フリーパスポートが配られるので、それが一層女子達を燃やす。

オレとしてはフリーパスポートより女子の話にたびたび出てくる大浴場の使用許可がほしいけどな。

「まあ、やれるだけやってみるか」

「やれるだけでは困りますわ！一夏さんには勝っていただきませんと！」

「そうだ、男たるものそんな弱気でどうする」

「織斑君が勝つとクラスみんなが幸せだよ！」

「負けないように指導はしてやるよ」

一夏の一言にセリシア、箒、クラスメイトが次々に好きな事を言い、オレもそれに乗る。

まあ、一夏のＩＳでのセンスは結構なもので、最初の方は戸惑いながらも今では動きにぎこちはなく、滑らかになっている。

専用ＩＳである白式は完全に近接格闘戦なタイプのため、なかなか難しく生身ではなかなかやれない射撃訓練でなく剣道などで格闘戦能力は伸ばせることができる点などを見れば相性は結構いい部類に入るだろう。

「織斑くんがんばってね！」

「フリーパスのためにもね！」

「今のところ専用機を持っているクラス代表って一組と四組だけだから余裕だよ」

まあ、どこまで一夏がいけるかっていう点も楽しみだな。

「―その情報、古いよ」

ん？なんかすげえ懐かしい声がしたんだが？ふと後ろを向いて見る

「二組にも専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

腕を組み、片膝を立ててドアにもたれていたのは―

「鈴……？お前、鈴か？」

「鈴か…こいつは本当に久しぶりだな」

「そうよ、中国代表候補生、凰鈴音（ファン・リンレイ）。今日は宣戦布……」

ふっと小さく笑みを漏らし、こちらを見ると携帯ゲームのプレイ中にカセットを抜き止まってしまった画面のように動かなくなる。

「……へっ？」

きょとんとこっちを見て両目を見開いている。

あれ、どっかでこの光景を見たことがあるんだが？

「……あきら？輝なの？」

指を指してこっちを呆然と見ている鈴。

「そうだが鈴、後ろが邪魔になっているぞ」

「へっ？」

「もうすぐＳＨＲの時間だ。教室へ戻れ」

「ち、千冬さん…」

「千冬先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すいません……」

すごすごとドアからどく鈴。そして数秒たつと

「えええええぇぇぇええええぇぇぇえええぇ！！！」

急に意識がはっきりしたのか鈴がいきなり絶叫を上げる。

バシンッ！

「うるさい黙らんか」

「うっ、すいません…」

千冬さんの出席簿アタックを食らい頭を抱える鈴。うわ～、痛そうだな～。

「鈴、なに格好付けていたんだ？すげぇ似合わなかったぞ」

「んなっ……！？なんてこと言うのよ、アンタは！くっ、もう時間がない……。一夏！輝！また後で来るから逃げないでよね」

そういって鈴は脱兎のごとく猛ダッシュしていく。おい、なにが言いたかったお前は？

「っていうかアイツＩＳ操縦者だったのか。初めて知った」

「…一夏、それに輝。今のは誰だ？知り合いか？えらい親しそうだったが？」

「い、一夏さん!?あのことはどういう知り合いで?」

他のクラスメイトからも質問の嵐が飛んでくるが彼女たちは重大な事を忘れていた。

今この場には閻魔大王様に等しいぐらいの人物がいることを―

バシンバシンバシン!

「席につけ、馬鹿ども」

千冬さんの出席簿アタックが火を噴き、クラスメイトの頭を叩く。

叩かれまくりだぞ皆。そのうち叩きすぎた千冬さんが1UPするかもしれないぞ。世界一有名な配管工のおっさんみたい。

そして授業は始まり、箒とオルコットさんは注意や出席簿アタックを何回も受けていた。

昼休みになり、オレ一夏と箒、オルコットさんにクラスメイト数人が食堂に向かっていた。

箒とオルコットさんは一夏に対して“朝のことが気になって授業で何回も叩かれたのはお前(あなた)のせいだ(ですわ)”と言われ一夏は反論する。

ま、そんなに一夏のせいにしたけりゃあアメリカで裁判でしてもらえ。

なにしろあそこは泥棒しに入った泥棒が痛んだ屋根裏に穴が空き落

ちたため怪我をして賠償金の請求に成功しているぐらいだからな。

食券をそれぞれ買い、一夏は日替わりランチ、箒はきつねうどん、セリシアは洋食ランチを買っていた。

またお前らいつものそれかよと心の中でツッコミをしつつ、オレは今日は味噌ラーメンを頼んだ。たまには味噌もいいかなと思って頼んでみた。

「待っていたわよ、一夏！輝ぁぁあああ！」

オレ達の前に立ちふさがったのは噂の転校生、凰鈴音だった。ちなみにオレや一夏は鈴と略して呼んでいる。

しかし、オレが最後に見たのは中一の頃だったのにかわらねえな。

小柄な体で鋭角的でありながらもどこか鮮やかさを感じさせる瞳に金色の留め金で高い位置にツインテールを作っている鮮やかな黒髪が特徴的だ。

「なんだお前はいきなりオレに対して叫ぶとは。あれか？〇本さんの真似か？」

「ちがうわよ！！」

「鈴、とりあえずそこをどいてくれ。食券出せないし、普通に通行の邪魔だぞ」

「う、うるさいわね。わかってるわよ一夏！」

鈴はすでにお盆を持っており、ラーメンが鎮座している。

「のびるぞ」

「まずくなるぞ」

「うぅぅぅぅぅ！大体、アンタらを待っていたんだしょうが！何で早く来ないのよ！」

無茶ないいぶんだな、おい。そんなに訴えたいならアメリカの裁判―以下略。

それにしても外見だけでなく中身まで変わっていないとは…まあ、鈴らしいな。

「それにしても久しぶりだな。ちょうど丸一年ぶりになるのか。元気にしてたか」

「げ、元気にしていたわよ。アンタこそ、たまには怪我病気しなさいよ」

「どういう希望だよ、そりゃ……」

ん？鈴が一夏との距離を埋めるための希望だけどな。

少しは気づいてやれよ朴念仁よ

さてオレも続くか

「それにしても久しぶりだな。ちょうど約三年ぶりになるのか。元

気にしてたか」

「ふん。何で生きているのよアンタ」

「ひでぇ！一夏コイツ酷い！！」

「いや、仕方ないと思うぞ…」

「お前もかよ！」

一夏が指をさしたテーブルにオレ達はそれぞれの昼食を持ってイスに座り、昼食を食べながら話を続けた。

「鈴、いつ日本に帰ってきたんだ？おばさん元気か？いつ代表候補生になったんだ？」

「アンタ質問ばっかりしないでよ。アンタこそ、なにＩＳ使ってんのよ。ニュースで見たときはびっくりしたじゃない。…で」

鈴がこちらに少し睨むような目つきで目を向け

「何であんたここにいるの」

さらにじろりと眼を鋭くさせた鈴がオレに問い詰めてくる。

「いや、話すと長くなるから―」

「今ここで話しなさい、手短に」

「ふっ、それは無理だな」
そう言ってオレはわざと得意顔を作る。どうだ！？
ドスッ！
「～～～～～～！！！」
オレは悲鳴を押し殺した声を口から漏らした。
何故かと言うと鈴はオレの足の甲にかかと落としを落としてきたからだ。
しかも器用に足の位置を見ることができないテーブルの下で。
マジ痛いぞ鈴！
「ふん、わかったわ。今のところはこれで我慢してあげるわ」
「ふ、ふざけるな…（泣）」
フンと顔をそむける鈴に向かってオレは涙目になりながら抗議したが向こうには受け流される。
「で、この馬鹿はほっといて一夏、その子は誰？」
馬鹿じゃねえ！という反論はともかくオレと一夏の幼なじみである鈴が同じ幼なじみの箒を知らないのも無理はない。
箒は小四の終わりに引っ越していき、鈴は小五の頭に引っ越してき

たからちょうど入れ違いになっているから面識がないのは当たり前だ。

「箒だよ。ほら、前に話したろ？小学校からの幼なじみで、オレの通っていた剣術道場の娘」

「ふうん、そうなんだ」

鈴は箒をじろじろと見て、箒も負けじと鈴を見返していた。

「はじめまして。これからよろしくね」

「ああ、こちらこそ」

そっけなく鈴と箒は挨拶を交わすが一瞬、紫電のようなものがとびっちったようにみえた。

ああ、さらに一夏という領土を占領するために戦争に参戦した国が増えてしまった。

「ンンンッ！わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生、凰鈴音さん？」

「……誰？」

「なっ！？わ、わたくしはイギリス代表性候補生、セリシア・オルコットでしてよ！？まさかご存じないの？」

「うん。あたし他の国とか興味ないし」

「な、な、なっ……！？」

段々と怒りで顔を赤く染めていくオルコットさんに、それに全く興味はなくラーメンを食べる鈴。

「い、い、言っておきますけど、わたくしはあなたのようなものには負けませんわ！」

「ふ～ん。でも戦ったら私が勝つよ。悪いけど強いもん」

その言葉でさらにオルコットさんは顔が赤くなり今にも爆発寸前のマル〇インみたいになっており、箒も今の言葉が癪に障ったのか無言で橋を止める。

鈴は相変わらずマイペースにどんぶりを持ってごくごくとスープを飲む。

こいつはホントにレンゲを使うという思考がないようだ。

前に一度気になって聞いてみると『女々しいからとイヤ』という答えが返ってきた。

いやお前、女だろ？というツッコミは当時、脛蹴りで返事をされ悶絶した記憶があるのでもういわない。

オレはスープをレンゲですすり、濃厚な味噌の味を楽しむ。

うん、こいつはなかなかうまいな。また近いうちに食うか。

「は～、オレ今日はちょっと行きたいから片付けるわ。それじゃあ」

そう言ってオレは席を立ち、返却口に食器を置いて出口へ向かう。

「ちょっと待ってくれ輝！」

後ろで何か言っている一夏を無視してオレは食堂から出る。

健闘を祈るぞ親友よ。まあ、期待はしてねえけどな。

「待て、お前ら！俺は輝のように慣れて―」

「一夏！男たるもの言い訳など見苦しいぞ！」

「そうですわ。ちょっと実戦混じりの本格的な練習だと思ってくれますか？」

放課後の第三アリーナでただいま一夏は箒とオルコットさんの一対二の戦闘で必死になって戦闘をしていた。一夏がまたも地雷を踏んでしまい、しかも今日は箒がＩＳ『打鉄』を装着しており、いつもより火力が大きいクレイモア地雷級だ。

オレはアリーナの客席でその光景を見ている。

『輝！お前からも何か言って―』

「一夏、骨は拾ってやる。ガンバ、ガンバ」

『お前もかぁぁあぁぁ！！！』

ああ、幼なじみだけでなく入学一週間でイギリスの女子に気を持たれたなんて中学時代の親友である五反田が聞いたら血涙しながら怒り狂うぞ？

あ。箒が接近戦に持ち込み一夏を追い込み始めた。

一夏だけでなく箒にもオレは放課後に指導しているが、箒も近接格闘戦闘なら賢動で経験も豊富なためその点だけを見るなら優秀な部類に入る。

一夏も成長はしているもののまだ動きに荒い部分があり段々と疲労していく。

箒は普段から鍛えており、オルコットさんもＩＳの訓練の量は代表候補生だけあってずいぶんと余裕の表情をしている。

まだ一夏は経験と訓練が足りないので持久戦では段々と不利になっていくことがわかっていた。

さて、もう少ししたら訓練を終了する時間だな。

アリーナの階段を降り、ピットに向かう通路に出たらそこに一人の少女がいた。

「鈴、どうした一夏ならもうすぐピッドに戻るぞ？」

「わかっているわよ。でもその前にアンタがこの三年間どうしていたか聞かせてもらうわ」

そこには幼なじみである鈴が立っており、こちらを睨むような視線

を投げつけてきた。
一夏と同じく小、中学校で過ごした仲だから当時のことはショックを受けたのだろう。
特にこいつはアイツの事もあるからな。
しかしオレの返事はもう決まっていた。
「……悪いが秘密事項だ鈴。」
「秘密事項ね。どうせアンタ一夏にもそう言ったんでしょう？」
「そうだな」
さすがはセカンド幼なじみ。オレの行動も呼んでいるのかよ。
しかし、絶対納得してくれないだろうな。
「……そう、わかったわ」
鈴は目を細め、呟くような声で―しかしはっきりと言った。。
「じゃあね、私一夏を迎えに行くから」
そう言って背を向け一夏がいるピッドに向かって鈴は去って行く。
（おいおい、鈴がこんな行動を取るなんて…意外だな）
アイツの事だから、かなりしつこく聞いてくると思っていたが…。

「人間変わるもんだな」

そう鈴の通り過ぎた通路に向かって呟き、オレもその場を後にする。

第7話　さらに転校生が…ってソイツ知ってるよ！（後書き）

というわけで第七話終了。ぶっちゃけ会話しかない。
これからなかなか書けずにどうやら不定期になりそうですが
目標は原作一巻は今年には終わらせたいと思っております。（後2、3話ぐらい）
あと一夏のキャラが少し崩壊していました…なんてこったい！
それではまた次回

第8話　同時に始まった2つの舞踏会（前書き）

ＰＶ２５０００　ユニーク５０００突破！！

ありがとうございます！そしてまたまた遅れて申し訳ありません（泣）

そして今回は少々急展開すぎるかもしれません。

第8話　同時に始まった2つの舞踏会

アリーナの出入口で一夏達と合流した後、夕食を一緒に食べていつものようにオレは一夏と箒の部屋に遊びに来た。

「うい～す。一夏～オレの分もお茶くれ～」

ドアを開けて中に入ると一夏がちょうどお茶を入れる準備をしているところだったので追加を頼み、空いている一夏のベットに倒れ込むようにダイビングをかます。

ベットの心地よさと羽毛布団の柔らかさが素晴らしくいい。

仮眠室のベットは固いからこういうベッドでたまには寝たいよな。

こんなベットで寝たらどれだけ素晴らしく寝る休日を過ごせるのだろう。

一夏に交換条件でも出してみるか。先週アメリカの研究所に送りつけて際に余ったひよこ饅頭と1箱と。

「こら、行儀が悪いぞ輝」

でもこの部屋には今俺を注意した一夏のファースト幼馴染である箒がいるから絶対そんな条件を許してくれないだろう。っていうかひよこ饅頭じゃダメか。

「輝、その前にお茶でも飲めよ。食後にすぐ寝るのは消化に悪いぜ」

「サンキュー」

オレは一夏から差し出されたお茶を受け取るため、体勢を立て直し

ながら布団の上で胡坐をかきお茶を受け取った。
さすがに寝たままじゃあ受け取られないからな。
湯呑に入ったお茶をすすると濃厚な香りが鼻を通り気持ちが一層落ち着く。
「いやあ、それにしても相変わらず一夏はこういうスペックが高いな。いい嫁さんになれるぞよかったな」
「婿じゃなくて嫁かよ！」
「いやだってな…そう思うだろ箒？」
「な、何故そこで私にふるのだ！？」
視線を投げかけた箒が頬を赤らめながら反論してくるが迫力に今一つ欠けるため照れ隠ししか見えない。
「だってよ～、こんな家事のスキルが高ければお前だって将来楽できるぞ？」
「む、それは確かに……って何を言わせる！」
箒が一度は肯定したようにうなずくが将来一夏といる光景でも想像したのかさらに顔が真っ赤になった。
コンコンコン
突然入口のドアが叩かれて会話が中断する。

「んっ？誰か来たのか」

「あ、オレが出るから箒と輝は待っといてくれ」

一番ドアに近かった一夏が立ちあがり、ドアを開けるとポストンバックを持った鈴が入ってきた。

「どうしたんだ鈴。いったいこんな時間に―」

「うん。ちょっと交渉にね」

「というわけだから、部屋代わって」

「ふ、ふざけるなっ！なぜ私がそのような事をしなくてはならない！？」

鈴が一夏と箒の部屋に来て１５分が経過した。
話を聞けば鈴はアリーナに出迎えに行った時、一夏と箒が部屋に住んでいることを一夏から聞き、一夏はこのことに対し『同室者が幼なじみでよかった』と発言し、鈴は『幼なじみならいい』という結論になり、部屋に押し掛けてきたらしい。

鈴は昔から我を行く性格こういうことに引くつもりは一歩もなく、箒は人一倍頑固なためそんなことが受け入れられないため、話に解決の糸口が見えずにダラダラと時間だけが経過していく。

一夏は二人の話に巻き込まれ近くに座らされており、オレはその様

子をできるだけ遠くから観察するためにベットの上から見ている。
まったく、何で一夏はこういうトラブルを持ちこむんだよ。この恋愛原子核の持ち主め。

「ねえ一夏、あたしがここで暮らしても問題ないわよね」

「一夏、わかっているだろうな」

鈴と箒が同意を求めるような眼で一夏を見るというよりもむしろ睨んでいる。
あれはつらい。どちらにも賛成できず仮に片方に賛成したらもっと大変なことが起きてしまうのは目に見えている。

一夏頑張れ！今のオレにはこの状況をどうすることもできない。

「とにかく！部屋は変わらない！出ていくのはそちらだ！自分の部屋に戻れ！」

「ところでさ、一夏約束覚えている？」

箒が怒るが鈴は無視して、一夏の方に話を振る。
話を無視され激昂した箒は竹刀を手に取り―っておい！

「あ、馬鹿―」

「止めろ！」

オレは素早くベットから飛び出て箒が竹刀を振り上げる瞬間に背中から右手の手首を掴み、素早く捻り体勢を崩し、ベットの上に箒を

押し付ける。

「くっ！何をする輝！！」

「落ちつけ箒！防具をつけていない奴に竹刀を振うな！！」

その言葉が聞いたとたん激しく抵抗していた箒が急におとなしくなってくれた。

まったくあともう少しで鈴に当たっていたぞ。２人とも幼なじみとはいえ目の前で怪我されたらこっちだって気分が悪い。

「箒。竹刀をしまえ」

「……すまない輝…」

「わかりゃあいい。鈴に謝っとけ」

組手を解き、竹刀をかたずけ箒が気まずそうに鈴を見る。

「その…すまなかった。ついカッとなってしまって…」

「ふ～ん。まあ、いいけどね。輝が止めてくれなくても受け止めていたから」

鈴を見るといつの間にか右腕だけにＩＳを部分展開していた。

仮にもしオレが止めなくても鈴は発言どうり箒の竹刀を受け止めていたに違いない。

「鈴も少しは落ち着いて話をしろ。いきなり部屋を代わってと言われ『はい代わります』って即答すると思うか」

「居るんじゃないの？この地球のどこかに」

「お前は小学生か！」

「そういえば鈴、約束って言うのは―」

プルルルプルルル

一夏が何か言おうとした瞬間に突然の電話の着信音が響き、それはオレの胸ポケットで振動している携帯電話からだった。サブディスプレイを見ると電話登録されていない番号らしく電話番号だけが映し出されていた。誰だよおい？

「わりい、ちょっと」

一言一夏達にいい、会話の邪魔にならないように廊下に出て携帯のボタンを押す。

「もしもし？」

『夜分に失礼します。轟輝様でよろしいですか？』

いきなり電話の向こう側から見知らぬ女性の声が聞こえてきた。

いったい誰なんだ？聞こえてくる声にまったく聞き覚えがない。

「すいませんがいったいどなたでしょうか？」

『申し訳ありません。私はＩＳ装備開発会社『げっか』渉外担当・山田花子と申します』

正直すごい名前だと思う。山田花子って例文の名前を書くところにありそうな名前だと思ってしまったのはオレだけじゃないはずだと思う。

『本日は我が社の製品を見てもらいたくて後日会えないかとご相談にきたのですが』

「いいえ、お断りします。そういうことは学園側の許可をもらってからにしてください」

やはりこういう手の電話か。よりによってもうアメリカが公開したオレに関する情報が掴まれているのか。

しかしこういうのは学園側からの許可をもらってはじめて交渉の段階に入れるというのに。

『そこを何とか！５月中に会えるように考えてくれませんか。その際には我が社が誇る最新鋭の技術が詰まったものを―』

だが相手もここで引くわけにはいかないのか言葉の勢いを緩めない。

なにしろ相手にとって一夏とオレは世界中でたった２人しかいないＩＳを使える男子だからそんな人間は宣伝効果の面で見ればかなりの効果が期待されるので相手にとってもこの交渉は重大といえる。

こっちは子供だからむこうはうんと時間をかけて交渉してくるのだろう。

だがそういうことはさせない。

「断ります。オレはアメリカで登録しているＩＳの搭乗者なのでむこうが勝手にそんなことを許可してくれるはずがありません。さらに向こうからもこう言う電話は来ていたんですけどそれは全てＩＳ開発研究所『バード・フライト』に通しています。まあ、結果をいえば私に届く電話などありませんでしたけどね。さらにそのことはそちらが掴んでいるはずの情報にもそのことは書いてあったはずですが？そして最後に」

決して相手の言葉の発言を許さないことこそが交渉を受ける人間にとっての有利な点だ。

交渉を申し込む者の立場はたいてい相手より不利な場合が多い。そしてその言葉の嵐の最後にインパクトの大きい言葉が出ればよい。

「あなた方がどうやってオレの電話番号を得たか知りませんがこのようなことが今後あれば上に報告してもいいんですよ？」

「……大変申し訳ありませんでした。失礼します」

相手の女性は少々怯えたように電話を切る。

このぐらいしないとまた相手は電話をかけてくるだろう。まあ、こんなことをやっても暫く経てばまた掛かってくるだろう。やっぱり日本で買ったばかりの携帯電話に着信拒否設定とか曖昧にしていたからまずかったな。部屋に帰ったらじっくり…。

『最っっ低！女の子との約束をちゃんと覚えていないなんて、男の風上にも置けないヤツッ！犬に噛まれて死ね！』

一夏よ、オレがいない間になにがあったんだよオイ。

ガチャ！ドンッ！！

ドアノブに触れようとした瞬間に勢いよく扉が開き、中から鈴が飛び出してきたがぶつかりそうになるところを鈴が思いっきり避けたものの、勢いがあり過ぎたのかこけそうになっていた。

「よっと」

鈴の肩に素早く手を伸ばし姿勢を安定させてやる。

「おい、鈴いったいどうし―っ！」

こっちを向いた鈴は顔を真っ赤にしながらこちらを睨みつけており、しかし瞳はうっすらと涙で濡れており、それ―涙が流れるのを我慢するかのように唇を結んでいた。

バシンッ！

鈴は無言でおもいっきりオレの右腕を叩き、肩にふれていた手を無理矢理弾き廊下の向こう側へ全力で走っていった。

久しぶり―3年ぶりに見た鈴の泣きそうな顔を見てただ呆然とすることしかできなかった。

そして一夏と箒の部屋に戻り、一夏に問い詰めたところ話を聞いている内に鈴がなぜあんな行動を取ったかがわかりとりあえず頬に赤い手形がある犯人にヘッドロックをかましておいた。

次の日の放課後

今日は一夏の練習の担当だったが用事ができたためにオルコットさんに訓練の担当を譲ってやった。箒は悔しがっていたが今度また代ってやると言ってその場を収めることに成功。

「失礼しま～す。ちょっと用があってきたんですけど」

「えっ！もしかして轟くん！？」

「とうとう私達のクラスに自分から足を運んでもらえるなんて…2組サイコー！」

「ねえねえ轟くんいったいどんな用事かな。私なら暇だよ」

「ちょっと！？抜け駆けはズルイわ！」

ちょっと入っただけなのに一斉に二組の女子が近づいてくる。正直もうそれなりに経つがまだこういう反応があるのはすごいと思う。よく飽きないよな最近の女子高生って。

「え～と凰鈴音さんっているかな？」

「たしか鈴さんはさっき帰ったよ」

一番前にいた女子が質問に応えてくれる。帰ったのか。ちょうど入れ違ったか？

「ありがとな。じゃあ…」

「あ、ちょっと待って！」

「そうそう簡単に逃がさないんだから」

あ、ドジった。

そう思ったときには多くの女子に掴まれ、教室の中心へと拉致されていった。

「はあ…はあ…。時間食ったな」

あれから二組の女子にいろいろと質問され、久々にかなりの精神を使った。

あれは何回やっても絶対慣れないな。

一夏、お前ってすげえよ。俺より早くこの学園に来たからオレよりもっとこういう経験を下に違いない。

オレは廊下ですれ違う女子一人一人に鈴の居場所を聞き、その情報を集計した結果から屋上へと続く階段を一段一段上り、屋上に通じるドアを開ける。

そこは普通の学校と違い、生徒がリラックスする憩いの場として改築されており花壇には色鮮やかな花が咲き、それぞれの円型テーブルにはイスが用意されており天気の良い昼休みになるとは多くの女子達で賑わう場所で実際にオレも一夏と一緒に女子に連れてこられたが確かにいい場所だ。

まだ夕焼けの時間には早いが地平線のむこうはかすかに赤く染まっており、屋上のベンチに一人の女子生徒が座っている。

頭が垂れており、後ろから見るとなんとなくだが落ち込んでいるように見える。

そろりそろりと近づき、さっき下の自動販売機で買った缶ジュースを静かに構える。

目標まであと7メートル…5…3…2…。

ニヤリ

ピタ

「にゃ、にゃあああぁぁぁぁ！！」

頬に冷たいコーラが当たり猫にそっくりな悲鳴を上げる女子もといセカンド幼なじみである凰鈴音。

「代表候補生がそんな油断していたらだめじゃねえか」

「あ、輝。あんた突然なにすんのよ！？」

「別に意味はない。ほれ」

さっき鈴の頬に当てた缶ジュースを渡す。

それにしてもさっきの悲鳴はこっちが驚くと同時に懐かしかった。

鈴が本当に驚いた時の声でかつて小学校の時にお化け屋敷に入った時によく聞いたな。

まあ、最もオレは別の事で怖かったが…。

鈴は一夏にアイツはオレに驚くたびに俺に抱きついて首までしめたからな。危うく最後の仕掛けでアイツが驚きすぎて息ができなくなり、お化け役の人が介抱してくれたという事態まで発展してしまった。

「隣座るぜ」

オレが隣に座ると鈴の全身から『怒ってます』オーラがフル出撃されて気まずい雰囲気放ち始めた。目つきは鋭く、眉間にしわを寄せておりおそらく幼児が見たら夜叉かナマハゲとして眼に映るだろう。

「いったい何でここに来たの？」

「少し昨日のことでな」

「別にあんたには関係ない事でしょ？何であんたが出るのよ」

鈴からの返事は予想どうりのきつい対応だ。

しかし俺も負けじと会話をつづけていく。

「一夏とお前のフォローだな。互いに久々に出会った早々に悪い関係になってどうするんだよ」

「別に。一夏が謝るまで私は絶対に許さないから。無論あたしから謝ることなんて無いよ」

その一夏が今現在では全く自分が悪いと思っていないから謝りに来ないぞという発言は控えておくことにする。

本来なら言った方がいいがまだ1日目だし、今夜から一夏を説得する予定だから言う必要はない。

「まあ。確かにそうだけどな。あんな約束だったら特に…」

昨日の話をまず一夏から聞く限り、オレが出て行ったあと鈴は小6の時に約束をした内容を一夏に問い詰めたらしく、一夏が覚えていたその約束は『料理の腕が上がったら毎日酢豚をただで毎日酢豚をおごってくれる』というものだった。

そのことを鈴に言うと何故か急に怒り出ていったというのが一夏の主張だったが普通『料理の腕が上がったら毎日酢豚を』っていう約束自体なんかすごい意味に聞き取れないことまないんだが…。

たぶん鈴はそういう意味で約束したと思う。じゃあなかったら小学校の終わりぐらいに手作りの酢豚を食べる実験台にならなかったはずだ。

うん、あの時の味はひどかったな。カーボン料理や×××料理にも匹敵するぐらいの出来だったと今さらながら思う。（もちろん悪い意味で）

「この屈辱は試合で晴らすわ」

鈴の口から出た一言を聞いてオレは冷や汗が一筋でるのを感じる。

まずいぞ一夏。鈴はやはり本気だ

今朝張り出されたクラス対抗戦の対戦表で一回戦目に当たるのがなんと二組。

即ち鈴とやらなくてはならない。
鈴はオルコットさんみたいに手加減はしないだろう。
いやそれどころか今の状態では全力で一夏を潰しにかかる。、
（一夏を過小評価するわけにもいかないけど、勝負するとなるとまずいな）
はあ、どうやら今日はまともに話せるタイミングを誤ったか。
「わかったよ。じゃあ今日は帰らせてもらう―」
「待ちなさい輝」
腰をあげようとしたら鈴が素早く俺の前で立ち塞がる。
いや、身長の問題で立ち塞げれてはないけど。そう言ったら間違えなく怒るだろう。
「輝、これから2つ質問するわよ。あんたは本当に話してくれないの？」
「なんのことだよ」
「三年前から今までどうしていたかっていうことよ」
なんでコイツ急にこんなことを言い出すんだ？
「昨日はいいって…」
「気が変わったの」

無茶ないいぶんだなオイ。

「無理だ。昨日も言ったはずだけど？」

「……明のこともなの？」

その言葉は心臓に大振りのナイフが刺さったかのようにオレの体温を奪っていき、体が冷えていったのが感じられた。

「ねえ、アンタ。あたし達がどれだけ心配したか分かっているの？父さんと母さんはインターネットや新聞であんたが行方不明になった記事があるかどうか夏休み中調べてくれて、弾もそれに協力してくれた。一夏は千冬さんに連絡を取って、独自の情報を少しでも見つけたかったのよ」

だがオレは何も言わない。いや、言えない。

「それなのに急に帰ってきたと思ったら事情を話せない…ふざけんじゃないわよ！」

ガン！

鈴が空になった缶ジュースを思いっきり地面に叩きつけた。

「あんたね、いったい何様のつもりなの！なんで事情を話してくれないの！？」

鈴は怒涛の勢いでこちらに問い詰めて来る。

（すまない…鈴）

心の中で鈴に対し謝罪してはっきりとオレは言い放つ。

「話すことはできない」

「っ！……ならあの時の約束は！」

「約束？いったいなんの…」

バンッ！

オレも全く人の事が言えない。鈴を宥めるつもりが一夏に続きまた怒らしてしまうなんて。

「あんたも一夏も大嫌い！約束を忘れるなんて！」

鈴はこの場を去るように走り抜けていなくなった。

（ゴメン…鈴。明…悪い。お前の一番の親友を怒らせちまった）

オレは心の中で明―オレのかつての義妹に謝った。

（それにしても約束って…いったいに何を？）

鈴は寮に急いで帰って自室に駆け込み、明りも点けずに自分のベットにダイブをして、布団に顔を埋めた。

「なんで…なんでなのよ、輝…」

鈴の顔は我慢していた涙が溢れくちゃくちゃになっていた。

昨日は一夏に約束を忘れられて、今日は輝に拒絶された。日本に帰って本当に嫌なこと続きだ。

不幸か幸いかルームメイトであるティナ・ハミルトンは友達の部屋に行っていて当分帰ってこない。

「ぐすっ…いったいなんでなのよ輝…」

行方不明になってからもし帰った時はまずしつこく事情を聴き、そして最後にお帰りといってあげるつもりだった。

でもそれができなかった。

輝はこの3年間何も連絡をくれず、戻ってきたときは一人になっていた。そういつも隣にいた彼女がいなかったのだ。

むろんそのことは自分でも簡単に予想できた。でもそれは3年前から信じたくなくても時間が過ぎることに受け入れなければならないことだった。

しかし昨日は改めてそのことを実感させられた。

何故いないのか聞きたい反面。そのことを聞くことが怖かった。

だから聞けれなかったが今日は怒りに身を任せ勢いで聞こうとした。

でもやっぱり駄目だった。輝は何も語ってくれない。

「ねえ…もう…本当に……会えないの……明…」

少女はかつての一番の親友である女子の名前を呟き、彼女はまた静かに泣き始めた。

5月になり、とうとうクラス対抗戦開始まで一週間を切った。

鈴に頬を思いっきり叩かれ早数週間、あの日から鈴と接触を試みようとするも向こうから逃げるように避けられ続けまともに会話すらままならない。

いったいどうすればいいものやら

それにしても鈴が言っていた約束っていったいなんだ。

あれから思い出そうとしているがなにしろあれからいろいろあったためぜんぜん思い出せない。

ああ、クソッ！ダメだ思い出せない！

第三アリーナに先に到着して現在ベンチで一人一夏達を待っているオレ。

明日から来週のクラス対抗戦へ向けてアリーナは試合用の設定に調整されるため今日が最後の特訓となる。

「それにしても幸せ者だな一夏」

向こうから一夏が箒とオルコットさんに挟まれながら歩いてくる。

両手に花とはまさにあれの事だな。ついでに一言『もげろ』

「もう来ていたのか輝？」

「とっくにな」

「一夏さん、今日は昨日の零反動旋回のおさらいからはじめましょう」

「何を言うか。それより剣術訓練の方が先だ！」

「ああ、もうわかった2人とも。さっさと入るぞ」

口論が終わりそうにない2人の会話に割り入り、アリーナのAピッドのドアセンサーに触れれば、バシュッと浪漫にあふれる音を立てつつドアを開ける。

「待っていたわよ、一夏」

“お前は勇者が進む道を先回りして待ち構えているボスか”とツッコミを入れたい気持ちにかられた。

オレ達より先にピッドにいたのはなぜか不敵な笑みを浮かべている鈴だった。

昨日まで怒っていたにもかかわらず何でこんな態度を取っているんだ？

ゾクッ！

不意に背筋が寒くなり恐る恐る振り返るとそこには箒とオルコット

さんが睨むような顔つきをしている。
こんなプレッシャーの近くにいたらさすがに肝っ玉が冷えるぞ。
「ここにいったい何の用事だ鈴」
「あんたには用はないわよ輝。ついでに後ろの二人も」
「なんだと！？」
「なんですって！？」
おーい、鈴。そんな余計な事を言わないでくれ。ますますプレシャーが増したじゃねえか。
「まあ、それは置いといて。……で、一夏。反省した？」
「へ？なにが」
「だ、か、らっ！あたしを怒らせて申し訳なかったなーとか、なかなおりしたいなーとか、あるでしょうが」
「いや、別に…鈴が避けていたんじゃねえか」
一夏！お前本当にわかってないのか！？
さっさと謝ってくれ一夏！そして早くその会話を終わらせろ！
後ろからの威圧が半端ないんだよ！
「あんたねぇ……じゃあなに、女の子が放って置いてって言ったら

放っておくわけ！？」

「おう」

自信満々に答えるな馬鹿！

「なんか変か？」

すげえ変だよお前。この場でお前以外はそう思っているから間違えなく。

「変かって…ああ、もうっ！とにかく謝りなさいよ！」

「だからなんでだよ！約束覚えてただろうが！」

うん。間違って覚えているよな。

「あっきれた。またそんな寝言言ってんの！？約束の意味が違うのよ、意味が！」

すると何故か一夏がこくんと小さくうなずいた。

「くだらないこと考えているでしょ！？」

え、何故ばれた！？って顔するな！

なんでそこで下らない考えができるんだよ。しかもばればれだし。

「あったまきた。どうあっても謝らないっていうわけね？！」

「だから説明してくれりゃ謝るっつーの！」

もうこうなった二人を止めるのは難しい。

鈴の奴も引かないが一夏も自分なりのプライドを重視するためごく稀に固い考えしかしなくなる時があり同じように引かない。

「じゃあこうしましょう！来週のクラス対抗戦、そこで勝った方が負けた方に何でも一つ言うことを聞かせられるってことでいいわね！？」

「おう、いいぜ。俺が勝ったら説明してもらうからな！」

「せ、説明は、その…」

鈴が何故かこっちに向いて頬を赤らめて申し訳なさそうな顔をしている。

なんでこっちに向くんだ鈴？オレは別に今の会話に関係ないんでけど…

「なんだ？やめるならやめてもいいぞ？」

バカ一夏！なに火に油をかけているんだよ！

「誰がやめるのよ！あんたこそ、あたしに謝る練習をしておきなさいよ！」

「なんでだよ、馬鹿」

「馬鹿とは何よ馬鹿とは！この朴念仁！間抜け！アホ！馬鹿はアン

タよ！」

鈴からの罵詈雑言を聞いて、一夏は眉をひそめた。

何年もこいつらに付き合った勘から何かを感じ取る。

オレの頭の中で鐘が激しく鳴り響いていた。これ以上喋らしては大変なことになると

「うるさい、貧に―」

「ストオオォォップ！」

バシッ！

一夏の口に素早くアイアンクローを仕掛け、発言を強制的に遮りアイコンタクトで話しあう。

（一夏、いい加減にしろ！）

（やめろ輝！俺は鈴にガツンと―）

（そのガツンは間違えなく鈴の最後の良心を吹き飛ばして大噴火させるからやめてくれ！）

「あんた達…いったい何をしているの？」

地獄の底から這い出て来るような低い声で話しかけてくる鈴。

マズイ…少し聞こえたのか？

「ねえ一夏？もう一度行ってくれないかな」

声は高揚がまったくなく、まるでホラー映画に出てくる人間みたいいつも見える目は前髪で隠れ、肩はぶるぶると震えている。

正直怖すぎます、はい。

しょうがなく一夏を開放するが開放する瞬間に素早くアイコンタクトで『絶対あの単語は言うなよ！』と念押しをしておいた。

不安ながら今は一夏を信じよう。

「うるさい、顰蹙（ひんしゅく）にさせるなって言いたかったんだよ」

「それはこっちのセリフよ！」

なんとか（？）最悪の事態は免れたがまだ鈴という名の大嵐は存在している。

「それにしてもあんた達は相変わらず厭きれるわね。揃いも揃って何も成長してないよね」

「お前こそ小学校の時からあんまり体型は変わってないじゃねえか」

あ、オワタ／（＾０＾）＼

台風・鈴。最大風力で一夏を直撃。

ドガァァンッ！！！

いきなり爆発音が聞こえたかと思ったら鈴は右肩から指先までＩＳ

装甲化している。

ああ、もうこりゃあダメだ。

「い、言ったわね……。言ってはならないことを、言ったわね！」

ＩＳアーマーから紫電がぴじじっと走る。

ようやく一夏も戸惑い始めたがもう後の祭りだ。

「い、いや、悪い。今のはオレが悪かった。すまん」

「今の『は』！？今の『も』よ！いつだってアンタが悪いのよ！」

悪い一夏。鈴に同情してしまった。

“いつだって”は言い過ぎだと思うがもう鈴の堪忍袋の緒はとっくに切れているぞ。

「ちょっとは手加減してあげようかと思ったけど、どうやら死にたいらしいわね……。いいわよ、希望通りにしてあげる。—全力で、叩きのめしてあげる」

最後に今まで見たことがないくらい鋭い視線を一夏に送り、鈴はピッドから出ていった。

「一夏。お前って奴は……」

呆れながらも鈴がさっきまでいた近くの壁に直径三十センチほどのプチクレーターができていた。

建物の壁は特殊合金製でできた壁をへこますほどの力か…。

「……パワータイプですわね。それも一夏さんと同じ、近接格闘型……」

さすがは代表候補生。真剣な眼差しで壁の破損痕からすぐに察するとは。

でもどうすりゃあいんだよ。これから……。

試合三日前の夜

「っ！！……もしかして……」

起きたばっかりで意識がはっきりとしない頭を無理に動かしながら通信を入れる。

『呼ばれて出てきてピッカピカーン！戦闘教導部隊のうら若きエース、エレナ・ローウェルでーす♪』

「知っています」

『ガーン！アキラー、反応薄いよ。もっと私をサティスファクションさせてよ！』

「無理です。で、今日は個人的な用件で少々頼みごとが…」

『お姉さんにまっかせなさーい。でなんなの？』

「ちょっとそっちで買い物をしてもらいたいんですけど」

そしてとうとう試合当日になった。

当初の予定では各アリーナで試合が行われる予定だったが何らかの不都合で第一アリーナが使えないらしい。

まあ、そんなことより今はこれからもう少しで始まる一夏と鈴の試合を見るために第二アリーナは全席満席。それどころか廊下まで生徒や関係者があふれている。

今までは客席に座っていたがすこしトイレに行きたくなったので席を外していた。

「さて、もうちょっとで始まりますか」

蛇口の自動センサーから出た水で手を洗っていると携帯電話が鳴り始めた。

「もしもし？」

『お久しぶりです轟輝様。私はＩＳ装備開発会社『げっか』渉外担当・山田花子と申します』

なんで今このタイミングでかけてくるんだよ！

「申し訳ないですけどこっちはちょっと会話をする余裕が…」

『はい重々承知しております。今ＩＳ学園ではクラス対抗戦が行われようとしていらっしゃるんでしょ？』

「そうです。だからあなたと―」

『だからこそ我が社をアピールするチャンスです』

なにいっているんだコイツ？
チャンス？いったいどういう…。

『ＩＳ学園・第一アリーナに我が社の最新商品“カラミティ”を送りつけました』

今度こそ本当に背筋がぞっとすると同時に胸の奥から忌々しいものがこみ上げてくる。

『さて次にこの商品の解説ですが―』

携帯を切ってオレは第一アリーナに向けて全力疾走し始めた。

もっとだ！もっと速く走れ！じゃないとここの人達が！

第一アリーナは気味が悪いほど誰もおらず、開きっぱなしのピッドゲートをくぐり抜けながらオレの専用ＩＳアクティブ・ホークを身に纏いゲートを出る。

そこは無人で客席には誰もおらずまるでゴーストタウンのような感覚だ。

まだ誰もいな…ッ！

突然アクティブ・ホークのハイパーセンサーからロックオン警告が鳴り響き、とっさに逆噴出制動（スラストリバース）を行うと同時にさっきまでいた場所に無数の高弾が着弾する。

「遮断シールドが展開された！？」

突然アリーナの遮断シールドが展開され始め、一機のＩＳが宙から舞い降りてくる。

濃い緑色と灰色で、それはまるで軍人が戦場でペイントする迷彩のようなカラーリング。両腕は異様に長く、肩と頭が一体化したような形をしており首が全く見えない。

そして普通では考えられない『全身装甲（フル・スキン）』をしている。

体の各部にスラスター口が見られ、頭部は複眼のセンサーレンズが青白く不気味に光っている。

『どうですか？我が社の製品、無人ＩＳの一つ。ゴーストタイプ“スパイダー”は？』

向こうから声をかけられるもののその正体には気付いている。

「なんでお前らが介入してくる、聖戦協会！！」

『ふふふ、私達もビジネスをしてましてね。まあ、今日はお得意様からの要件を聞いただけですけどね。この一機もただのダンス相手ですよ』

この一揆も？ただのダンス相手？……ハッ。まさか、こいつらの狙いは！

『ほう、勘がいいですね。そうです今日の主役である織斑一夏様には別のダンス相手を用意していますよ。』

くっ、オレは奴らの誘いにまんまと乗ってしまったのか！？情けなさすぎるな、クソッタレ！

『ではあなた様にはその子のお相手をしてもらいますわよ？』

スパイダーと呼ばれた無人ＩＳはこちらに向かって襲いかかってくる。

「ちっ。ダンス相手にしちゃあ強気にさせすぎだろ！」

オレも五十一口径アサルトライフル≪サーペント？≫と大型ブレードブーメラン≪ハード・エッジ≫を展開させ迎撃に移行する。

“スパイダー”に対してまずはハード・エッジを投擲を行う。

ハード・エッジを避けたところでサーペント？のバースト射撃を行うが全身のスラスター口から異常なまでの出力を噴きだし回避される。

次はこちらの番だと言わんばかりに“スパイダー”は接近して腕を振り下ろしてくるが背部にある一対二枚の推進翼と４枚の多方向加速推進翼で回避をおこなう。

しかし“スパイダー”は驚きべきことに金属でできているはずの左腕を伸ばしてきた。

それはまるでとあるゴム人間の海賊団の船長みたいに不気味なほど伸びこちらの右足に絡めてくる。

「しまっ―うっ！」

おもいっきり“スパイダー”に壁に叩きつけるかの勢いで投げ飛ばされるがぶつかる寸前で小型の推進翼≪バック・ドラフト≫を起動させ、無理やり勢いを相殺する。

「お前にかまっている暇はないんだよ…」

そうだ。本当にこんな奴にかまっている暇はない。

こうしている間にも一夏や鈴に危険が迫っているんだ。

「もうオレは誰も救えないのはうんざりだ！！！」

アクティブ・ホークの出力をさらに上昇させ無人ＩＳ“スパイダー”に向かって吶喊する。

第８話　同時に始まった２つの舞踏会（後書き）

変なとこで終わってごめんなさい。

センター前になんとか推薦が決まったものの久々にパソコンを立ち上げるとお気に入り登録されていた作品はかなり更新されていたので感想がかけれなかったのが申し訳なさ過ぎてショックです。

そしてもうすぐＩＳ６巻の発売ですね！しかも今回は楯無会長が表紙だぜ！

とはしゃぐのもいい加減にして、この続きはＩＳ６巻を読み終わった後の高揚感でさらに筆記スピードを上げできれば今年中に原作一話を終了させたいと思います。

誤字脱字報告は遠慮なく言ってください。あとできれば感想も。

第9話　鷹は暴風と化し、友は勇敢となす。（前書き）

ミスを報告します。
前話での鈴が怒って部屋を出ていき輝が一夏に問い詰めた際に“鈴が小6の時にした約束の内容”という部分を“鈴が昔した約束の内容”に変更しました。

あと、今回で原作一巻を終了させる予定でしたがどうもあまりに長いため2つに分けました。後編は正月明けに投稿します。

今回は戦闘だけです。できるだけわかりやすく書いたつもりですけどそれでも少々わかりにくいかも……。

第9話　鷹は暴風と化し、友は勇敢となす。

第三アリーナ

輝が無人ＩＳゴーストタイプ“スパイダー”と戦い始める少し前、一夏と鈴の試合は始まっていた。

≪一夏ｓｉｄｅ≫

ガキィンッ！！

試合開始と同時に瞬時展開した雪片弐型が物理的な衝撃を受けるものしっかりと握っていたため弾かれずに済んだ。

「ふうん。初撃を防ぐなんてやるじゃない。けど―」

鈴は手にしているのは異形の青竜刀―と呼ぶにはあまりにもかけ離れた形状をしているがそれをバトンでも扱うかのように回しながら、自在に角度を変えながら斬り込んでくる。

（くっ、やっぱり代表候補生の名は伊達じゃないってことか！）

セシリアも最初の試合はあだったけど特訓の時にたまに行う模擬戦ではコテンパンにされた。

代表候補生になる際にはＩＳに関する知識や訓練を積まなくてはいけないらしく、しかもそれだけじゃなくて『あるとあらゆる事態』に対応するための訓練までしているらしい。

鈴が中学2年の時に国に帰ってそこから代表候補生になるために厳しい訓練を積んだのだろう。

将来、就職するためにを私立に入学しようとした俺と比べれば断然鈴の方がすごいと思う。

けどよ―

鈴の高速回転してくる刃に向かって≪雪片二型≫を上段からの振り下ろす。

「無駄だよ」

鈴は青竜刀―ハイパーセンサーから読み取られた情報から―双牙天月（そうがてんげつ）と呼ばれる武器を少し傾け雪片弐型の斬撃を受け流そうとする。

（今だ！）

俺はその振り上げを引っ込め、素早く鋭い突きに転じる。

「くっ！」

突然の出来事に驚く鈴でそのＩＳ≪甲龍≫のシールドを僅かながら削ることができた。

鈴がとっさに身をひるがえしていなければまともに食らっていたに違いない。

（斬釘截鉄（ざんてつせってい）か…いったい箒どこでこんな技を覚えたんだ？）

箒にＩＳと剣道場で教わった剣術を参考にして動いたんだけど思い

のほかうまくいっている。
箒にはずっと剣術訓練を教わり雪片弐型の形状である『刀』というものの間合いと特性を再度把握するために生かすことができた。
「へえ、やるじゃない一夏」
「まあな」
「でもこれは…どうかしら！」
ぱかっと鈴の肩アーマーがスライドして開き、中心の球体が光った瞬間に俺は目に見えない衝撃に『殴り』とばされた。
「今のはジャブだからね」
鈴はにやりと笑みを浮かべる。牽制（ジャブ）のあとは、本命（ストレート）と相場が決まっている―！
ドンッ！！
「ぐあっ！」
さっきより威力の増した衝撃でオレは地面に叩きつけられる。ずきんっとした痛みがシールドをバリアーを貫通して届いていた。
「まだよ！」
再び鈴があれを撃ってくると感じたオレはスラスターを全開にし、その場を緊急離脱するとさっきまでいた所に同じように見えない衝

撃がぶつかり砂埃が舞う。

「へえ、よくかわすじゃない。衝撃砲≪龍砲≫は砲身も砲弾も目に見えないのが特徴なのに」

衝撃砲という単語には聞き覚えがある。

輝の訓練でオレは武器の性質上近づかなければ攻撃できないのでその過程として近づく際にあらゆる武器を知り、そしてどのように近づけばいいのかという説明と訓練をしてきた。

たしか『空間自体に圧力をかけて砲身を形成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して撃ち込む』第三世代兵器って言ってたっけ。

でも輝。お前確か『まあ、珍しい武器だからまだ遭遇しないと思うけどな。これに関しては後回しだ』って言ったよな？

今、思いっきり目の前にいるんだけど。

それから鈴の一方的なまでの衝撃砲での攻撃が始まり、俺は防御せざるおえなかった。

（ハイパーセンサーに空間の歪みと大気の流れを探らしているが、これじゃあ遅い。追ってから回避行動しているものだ。ここは少々のダメージ覚悟でチャンスを窺う。）

雪片弐型をぎゅっと右手で握りしめ、先週の千冬姉の言葉を脳裏に浮かべる。

『雪片弐型は『バリアー無効化攻撃』を持っており、これはＩＳの

シールドを切り裂き『絶対防御』を強制的に発動させ、大幅にエネルギーシールドを削ることができる』

わかりやすい例でたとえれば『ＲＰＧで防御力を無視してダメージを与える攻撃ができる武器』ができる武器が雪片弐型だ。

この例はわかりやすかったのか？まあ今はそんなことよりも試合だ。

鈴とは実力の差は歴然としている。しかも鈴はセシリアとは逆に戦闘には冷静になるタイプだ。こう言う相手は基本的に強い。

でも俺は心だけは負けないように身構える。心で劣る者は実力が勝っても負ける。だから俺は信じて、あとはやるだけだ。

「くらいなさい！」

鈴が衝撃砲を再び撃ってくる。

（耐えてくれ雪片弐型！）

かつて千冬姉が使用していた雪片の後継型を信頼して俺は雪片弐型を正面に横で構え、盾代わりにする。

ドンっ！！

―ダメージ６８。シールドエネルギー残量、３３１。実体ダメージ中。

正面から衝撃を受けたため、シールドは結構持っていかれたが体勢を崩すことはなかった。

「今だ！」

そして俺は今までの輝との特訓で身につけた技能『瞬間加速』を発動させる。

急激なＧはＩＳの操縦者保護機能が防ぎ、一気に鈴との間合いを詰める。

『肉を斬らせて骨を斬る』

その言葉どうりに俺は瞬時に間合いを詰めた俺は雪片弐型を横に一閃し、鈴の右肩部の非固定浮遊部位に斬り込みシールドエネルギーを削ることができた。

「くっううっ。でもこっちだって！」

鈴が肩の衝撃砲を至近距離で発動させようとしてくるが、でもこっちだって、雪片弐型の二撃目を先に当てれば―

ズドオオオオッ！

「「！？」」

鈴は衝撃砲を起動させようとし、俺は雪片弐型を振り下ろそうとした瞬間に突然大きな衝撃がアリーナ全体を襲った。

「な、なんだ？何が起こって……」

『一夏、試合は中止よ！すぐにピッドに戻って！』

いきなり鈴がプライベート・チャンネルごしに怒鳴ってくる。
ああ、もう一体何なんでだよ！
―ステージ中央に熱源。所属不明機のＩＳと確定。ロックされています。
「なっ―」
『一夏、早く！』
輝に教わったでプライベート・チャンネルの通信方法を使えば鈴との回線を共有できるが、まだ慣れて無く時間もかかるし、今は緊急事態なのでオープン・チャンネルを開く。
「お前はどうするんだよ！？」
「あたしが時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよ！」
鈴がハイパーセンサーを通じて所属不明機のＩＳの方向に顔を向けながら近づいて来て、隣に並ぶ。
「逃げるって……女を置いてそんなことができるか！」
「馬鹿！そんなこと言っている場合じゃあないでしょうが！実際にあたしよりアンタの方が弱いんだから」
思いっきり容赦なく言われたがその通りだ。でもそれだからって鈴を見捨てるわけにはいかない。

「心配しないで、別にあたしも最後までやり合うつもりはないわよ。こんな異常事態―」

「あぶねえっ！」

「っ！！」

隣にいた鈴も反応して俺達が散開した空間に三本の熱源が砲撃された。

「ビーム兵器かよ……しかもセシリアのＩＳより出力が上だ」

ハイパーセンサーの簡易解析でその熱量を知った俺は、背中に冷たいものが伝わってくる思いだった。

「おそらくアリーナの遮断シールドを貫通した武器はこれね……」

鈴の声にも少々固いものが混じっている。

アリーナの遮断シールドはＩＳと同じもので作られている。それを貫通してくる兵器の威力なんて考えただけでもぞっとする。

「っ！」

「来るわよ一夏！」

再びビームの連射が放たれ、２人でそれをどうにかかわしていく。

ビームの連射が終わると同時にその射手たるＩＳがふわりと浮き上

がってきた。

それは普通のＩＳと違い全身が装甲で包まれている見たこともないＩＳだった。

背丈が２ｍを越える巨体に、両腕が異常に長く、すごく不気味なＩＳだ。

「お前、何者だよ」

「……」

へんじがない、ただのしかばねのようだ

「あんたこんな時に何考えているの！？」

さすがは幼馴染ばれたか。そしてゴメン、さすがに場違いだった。

『織斑くん！凰（ファン）さん！今すぐアリーナから脱出してください！すぐに先生たちがＩＳで制圧に行きます！』

突然、通信回線に割り込んできたのは山田先生だった。

「織斑くん！凰（ファン）さん！今すぐアリーナから脱出してください！すぐに先生たちがＩＳで制圧に行きます！」

ＩＳ学園の教師―山田真耶先生として予想外の事態に見舞われ、焦っていた。

クラス対抗戦でこのような事態になるなんて予想外すぎるうえに生徒達が危険な目にあおうとしているからだ。

『いや、先生たちが来るまで俺達が食い止めます。いいな鈴』

「織斑くん！？だ、ダメですよ！生徒さんにもしものことがあったら―」

そこで通信は途絶え向こうからの反応がなくなった。

「もしもし！？織斑くんも凰さんも聞こえています！？聞こえていますかー！？」

さっきまで反応してくれた2人だったがあろうことか本人達は所属不明のＩＳを倒すと宣言してから何度も呼びかけているが反応してくれない。

「落ちつけ先生。それにどちらにしろ、すぐには突入できんだろ」

「それはどういうことですか！織斑先生」

「オルコット、お前も落ちつけ。これを見ればわかる」

半泣き状態の隣にいる織斑千冬は目の前にいる話しにくいついてきたセシリア・オルコットにも見えるようにブック型端末の画像を操作して、第二アリーナのステータスチェックをみせる。

「遮断シールドがレベル４に設定……？しかも、ドアがすべてロックされて―あのＩＳの仕業ですの！？」

「そのようだ。これでは避難することも救助に向かうことも―」
突然、山田先生の隣にあった学園内専用の内線電話が鳴り響き、山田先生が対応に当たる。
「はい、もしもし！……えええぇええ！！第一アリーナも同じような状況に！？」
「第一アリーナ…でも確かあそこで今日は試合は行われてないはずでは？」
ふと思った疑問を口にしたセシシアの隣にいる千冬はこの状況であることを考える。
「オルコット。轟はどうした？」
「えっ？…確か轟さんは試合が始まる少し前にトイレに行ったきり見当たらないんですけど」
アリーナの何処かに入るんじゃないですか？
そう言ったオルコットの声はすでに聞こえず千冬はすぐに内線電話を山田先生に代わってもらった。
「もしもし、織斑です。緊急事態ゆえに申し訳ありませんが第一アリーナ内部の映像は出ますか」
『はい、映し出せます。でも中にはまったか誰もいませんでしたよ』
誰もいない？なのにここと同じ設定にされた？

「もうしわけないがその画像を１０分ごとの私の電子端末に送ってくれませんか」
『わかりました。１５秒ください』
ブック型端末のおくられてきたリアルタイムでの第一アリーナの画像が映し出される。
そして１０分前、２０分前と次々に送られてくる画像を展開していく。
「別におかしい点はありませんね」
途中から一緒に見ていた真耶がコメントするが千冬は画像の展開を止めない。そしてとうとう2時間までさかのぼったところである事実に気づく。
そして今現在のリアルタイムでの画像と1時間前、2時間前の画像を3つ画面上に横並びで出す。全く同じ場所の同じ画像だった。だからこそ千冬は見抜けた。
「一時間前から影が動いていない…」
「えっ？……ああっ！本当ですね！」
時と共に太陽は動き、影も動く。1時間前までは普通に影が動いていた。
しかし1時間前から建物の影が全く動いていなかった。
つまりこれは偽物の画像だと千冬は気づいた。

一夏と鈴の戦闘が始った十数分後の第一アリーナでは輝と無人ＩＳゴーストタイプ“スパイダー”との戦闘が続いている。

「はあああっ！」

接近してきた無人ＩＳに対し、ハード・エッジを片手で逆手で持ち、無人ＩＳ“スパイダー”の胸部中央辺りに向かって切っ先を振うが、全身に装着されているスラスターでこれを避けながら右拳のストレートを放ってくる。

背部の多方向加速推進翼では出すことのできない瞬間的爆発力を噴出する３組の左部の≪バック・ドラフト≫が作動し、その拳を避けつつサーペント？の銃身下部に装着されている大型の銃剣で腹部を切り裂さこうとするが敵ＩＳは左腕でそれを受け止める。

ガキッン！

一瞬火花が散るが相手に傷一つ付けることはできず、逆に“スパイダー”の右腕の一部が展開し、３連チェーンガンの砲身が露出する。

「マズッ！」

ガガガガガッ！

実弾が無数に至近距離から放たれ、ハード・エッジを盾にして、その攻撃の威力と多方向加速推進翼で一気に後退するもシールドエネルギーを削られたが置き土産と言わんばかりに後退する瞬間に置い

ていったピンの外れたハンドグレネードが“スパイダー”の目の前で爆発する。

だが爆炎の中から長い左手で全身を庇うような姿勢で“スパイダー”は姿を見せた。

オレが無人ＩＳ“スパイダー”と実際にやりあって結構たったがいくつかわかったことがある。

まず第一に伸びる腕は左手だけだが、おそらくこの原理は電磁収縮（カーボニック・アクチュエーター）炭素帯あたりが使用されていると推測する。しかも厄介なことにこちらが攻撃する時にその腕に電流を流し、硬度を調節しているためかなり固い。

第二に右腕には腕部に3連チェーンガン、手首部には2門のビーム砲が収納されている。特にビーム砲に関しては出力がオルコットさんの使用していたライフルを上回る出力だ。

そして第3はかなりの索敵・目標捕捉能力を持っており、一度ジャムグレネードで電子器具をオシャカにしようと試みたが、ジャムスモークの中でもあっさり位置を捕獲され効果が全くなかった。しかも電子戦用妨害システムを搭載しているらしく通信回線までダメになっている。

実際にシールドエネルギーは半分近くまで削られ、サーペント？の予備マガジンもあと1つ、特に相手の猛攻に耐えてきたハード・エッジの耐久力もそろそろ心もとなくなってきた。

（くそっ！早くあいつらの所に行かないといけないのに）

俺が戦闘を始めたと同時にハイパーセンサーから送られてきた外からの衝撃音で一夏達の所にも無人ＩＳが介入したことを予測できた。

来るっ！

再び思考を接近してくる無人ＩＳに集中させて、また戦闘に入る。

互いに攻防を繰り返し、時間だけが過ぎて行き、シールドエネルギーも僅かずつじわじわと削られていく。

（このままじゃあジリ負けだ。多少無茶はするが！）

サーペント?をフルバーストで連射し、ハード・エッジを投擲するも相手は一気に間合いを開け、銃弾は左手で受ける。ハード・エッジは簡単に避けられ“スパイダー”のはるか後ろの地面にささる。

装弾数が０になったサーペント?を投げ捨て、二枚一対の推進翼を装備している背部ユニットから収納されていた柄部を握り分離・変形させ、アクティブ・ホークの初期装備である先進型多目的複合装備≪ストーム・バンガード≫を両手でしっかりと握り、相手にまっすぐにその切っ先を向ける。

背部推進翼ユニットだった大型実体剣の鍔部（つば）には推進翼時のスラスター口があり、むろんそれはこの状態でも使用できる。

背部の４枚の多方向加速推進翼を全開にし、“スパイダー”に対し再び吶喊する。

“スパイダー”がこちらに右腕のビーム砲を向けるがオレは速度を落とさず、さらにストーム・バンガードの鍔部にあるスラスターを

全開にし、獲物に向かってさらに加速する。

ズガッ！

その加速に反応できなかったのか射撃を中止し、回避に遅れた“スパイダー”の右手首を削り取り、シールドエネルギーを貫通した威力が２門のビーム砲を焼き切る。

なんとか突き刺さっているハード・エッジの横で背部スラスターの逆噴射を利用し、１８０度旋回を行う時にはすでに無人ＩＳ“スパイダー”は三連チェーンガンの砲身をこちらに向けて、ハイパーセンサーからの警告アラームがうるさく鳴り響く。

（今は耐え抜いてくれ！）

そう願いながらストーム・バンガードを再び背部ユニットに戻し、すぐ横に刺さっているハード・エッジを抜き取り、盾代わりにしつつ最低限の回避行動を取る。

ダダダダダッ！！

負担を減らすために回避行動を取るが銃弾の数は半端ではなくハード・エッジで受け止めきれない。

「くうっ！」

一秒ごとに、右肩や両足のＩＳのシールドバリアを貫通してきた痛みがフィードバックし不意に声を上げてしまう。

しかもそろそろハード・エッジの耐久力が限界地を迎えており、向

かい側からでもわかるぐらい外側は刃毀(はこぼ)れが激しい。

（後少し…後少しなんだ！）

そして数秒経ち“スパイダー”のチェーンガンのフルオートが終了すると同時に―

ピキーン！

ハード・エッジは真っ二つにガラス細工のような音と共に割れた。

でもおかげで切り札を出す準備は終わった。

「ありがとな…。おかげで間に合った！」

再び背部からストーム・バンガードを実体剣型に分離・変形し、突撃槍(ランス)のような構えでその切っ先を“スパイダー”に向ける。

ドゴンッ！

４枚の多方向推進翼に貯め込んだエネルギーを一気に放出し、『瞬時加速』で弾丸のような速さで敵との間合いを詰める。

「くらえええっ！」

“スパイダー”は左腕の電磁収縮炭素帯(カーボニック・アクチュエーター)の硬度を最大に上昇させ、『瞬時加速』でのスピードの乗った一撃を受け止め、接触部から火花と紫電が大量に飛び散る。

だがその勢いだけは止められず、共に弾丸になっていったところで

オレは切り札を切る。

「点火（イグニッション）！」

『瞬時加速』の原理は後部スラスター翼からエネルギーを放出、それを内部に一度取り込み、圧縮し放出する。その際に得られる慣性エネルギーを利用して爆発的に加速する。

そして４枚の多方向推進剤はもちろんのこと、背部スラスター翼であり武器でもあるストーム・バンガードだって使用できる。

それはこの状態でも―

ドンッ

さらに単体で加速現象を起こしたその巨大な剣は無人ＩＳの左腕とシールドバリアを貫き、さらに胸部の中深くまで斬撃は届き、身体の部分を焼き切っていく。

素早くバック・ドラフトを起動させその場を離脱。

頭部のカメラが壊れたライトのように何度か点滅するがやがて青白い光は完全に切れ、無人ＩＳ“スパイダー”は正面に倒れる。

それと同時にアリーナの遮断シールドが解除された。

「ハア…ハア…ハア…」

完全に機能停止している無人ＩＳ“スパイダー”を見る。左腕は見事に削り取られ、胸部の損傷が特にひどい。できれば今後のために

もう少し加減したかったが今は急ぎの身ゆえに手加減をすることができない。

（機体ステータス確認―エネルギー残量１１０。酷使したからバック・ドラフトの出力が安定しないな。ストーム・バンガードのスラスターも同じか…。）

他のパーツもかなりの負担がかかっており、ついでに武器も１つ失ってしまった。

やっぱり無茶な戦闘の結果がこれか…。

「でも行くしかないよな…無事でいてくれよ皆」

一夏や鈴、箒などのＩＳ学園で出会った人々を脳裏に浮かべながらアクティブ・ホークの背部多方向推進翼で上空に飛び、そのままっすぐに第２アリーナへ目指す。

第二アリーナにある程度近づいた所でハイパーセンサーを最大倍率まで引き上げアリーナの内部を確認すると明らかにＩＳ学園のものでないＩＳが確認できる。

（全身装甲のＩＳ。外見は多少は違うものの聖戦協会が送り込んだものか！）

その遮断シールドの中で一夏と鈴が何回も攻撃を試みるも無人ＩＳにかわされていく所が確認できた。

まだ無事か…よかった。

しかし遮断シールドが張られているので入って援護することもできない。

ひとまず第二アリーナの客席に降りようとした時に突然アリーナのスピーカからよく知っている幼なじみの女子の大声が響く。

「一夏ぁっ！」

うう、いくらなんでも音量大き過ぎだ箒。

「男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてどうする！」

不幸にもおれのいた場所はスピーカーの真下であったため兵器レベルの音量がぶつけられる。

でも箒。お前も一夏を心配しているからこそ激励の言葉を送っているんだろ？

あ、ハイパーセンサーで今確認したが箒がいる中継室に2人の女性が完全に伸びている。

うわぁ、いくらなんでも無茶すぎるぞ箒。あとで大変だぞ？

ってマズイ！さっきの放送で無人ＩＳが箒の方に向いている。

「仕方がねえ！」

遮断シールドに遮られているため決して届くことはないが、マガジンを再装填したサーペント？の引き金を引く。

ババババッ！

威力が全然足りず銃弾は遮断シールドに遮られるが突然意識していない方向からの反応で無人ＩＳの注意をこちらに向けることには成功した。

「あ、輝！お前今まで何処にいたんだ！？」

「後回しだ一夏！何か策はあるか！？やるなら今だ！無いなら時間を稼げ！」

「策は……ある！鈴、やってくれ！」

「わ、わかったわよ！」

鈴が両腕を下げ、肩を突き出す体勢になる。

ハイパーセンサーの情報から鈴の肩部にある兵器は衝撃砲であることがわかったがいったい何をする気なんだ一夏？

突然一夏が鈴の衝撃砲の射線軸に割り込んで来て、鈴は構わず衝撃砲を撃った。

一夏は衝撃砲から放たれたエネルギーを利用して一気に加速する。

『瞬時加速』での原理を応用した無茶な策で普通ならこんなことを実際に使おうとしない。

というかこんな芸当はオレでも思いつかなかった。

しかし一夏はためらいもなくそれをやってのけた。

さすがは三年に一度開かれるＩＳの世界大会の第一回大会の優勝者である姉を持つだけはある。そのセンスも弟にもあるのだろう。まだ破天荒的な意味でだが。

「まったくもう人使いが荒いことですわ！」

何処からかオルコットさんが客席に飛んで来て、ブルー・ティアーズを４機、分離させる。

「なるほど、考えたな一夏！」

一夏の考えがわかったオレはストーム・バンガードを分離・変形させ二又の実体剣状にして二又の間から露出する４連装ガトリング砲を構える。

それと同時に一夏の必殺の一撃が敵ＩＳの右腕を切り落とし、その斬撃の余波はアリーナの遮断シールドにひびを入れる。一夏が敵ＩＳの左拳を受けるものの眼は全く死んでない。

「「一夏っ！」」

二人の幼なじみの声が響くが一夏の顔はいたずらの成功を待つような顔をしている。

了解。

ストーム・バンガードの４連ガトリング砲が弱体化した遮断シールドを破壊し、刹那のタイミングでオルコットさんによるブルー・ティアーズの４機同時狙撃が無人ＩＳを撃ち抜くも無人ＩＳは満身創

痍にもかかわらず、残った左腕で鈴の方にビーム砲を向けている。

「っ！」

鈴はエネルギーが少ないのか回避行動に遅れている。

あれじゃあ、直撃してしまう。

「くそっ、間に合えぇぇぇぇっ！」

意識より体が先に動き、少しでも早く動くため、ストーム・バンガードを放り寝げ背部多方向推進翼を全開にし、ビーム砲が発射されると同時に鈴を庇うような形で射線に割り込む。そして次の瞬間には熱線にＩＳのシールドエネルギーを根こそぎ削り取られ、オレは左腕でその熱線から身を守るように庇う。

懐かしいような焼けつくような痛みが走り、あまりの多さに左手以外はどこが痛いのか分からないほどだった。

視界が徐々に真っ暗になっていく。

「あきらあああぁぁっ！！」

ああ、大丈夫だ鈴。だからちょっと後は任せるぜ…。

「一夏さん、狙われていますわよ！」

「うおおおっ！よくも輝を！」

一夏の叫び声が聞こえたような気がしたがオレの意識はそこでシャ

ットダウンされた。

第9話　鷹は暴風と化し、友は勇敢となす。（後書き）

どうせ次も一ヵ月以上先だろと思われた人は正直に手を上げてください。
そういう人に対してはパソコン画面に向かって土下座をやりたいですから。

では次回で原作一巻が終了し、簡単な説明分と短編を投稿した後に二巻に突入させるつもりです。

では、良いお年を！

第十話　男だからこそ中々言いづらいことだってある（前書き）

かなり久しぶりです。ようやく原作一巻が終了した……。

っていうかアニメが始まって以来、にじファンでの新しいＩＳのｓｓの数が恐ろしいことに……。

とにかく更新を頑張りたい……正月とっくにあけちゃってるよ……。

今回は視線がコロコロ変わるので読みにくいかも。

第十話　男だからこそ中々言いづらいことだってある

≪鈴ｓｉｄｅ≫

ＩＳ学園の保健室。あたしは朝早くからまだベットに寝ている輝のそばに腰かけていると保健室のドアが開いて、中から一夏と篠ノ之箒にセシリア・オルコットが入ってきた。

「鈴、輝の様子は？」

あたしは黙って首をふる。朝からずっと輝のそばにいるが輝は試合後、保健室に運ばれてからずっと目を開けない。

「ＩＳの絶対防御は操縦者を守るために発動したのであろう」

「ええ、ＩＳの保護機能が発動したといえエネルギーの残量はデータを見る限り少なかったとはいえ十分でしたわ。一夏さんが昨日、目覚めたのがその例ですわね」

「じゃあなんで輝は未だに起きないのだ！？」

「箒、落ち着けって。でも千冬姉や山田先生は大丈夫って言ってくれたけど心配だよな」

昨日、千冬さんは『大丈夫だ、命に別状はない。ただ眠っているだけだ』と言ってくれたが全然目を覚ましてくれない。

「そんなに自分を責めるなよ。輝が落ちたのはお前をかばったから

であって、決してお前のせいじゃない」

「うん……分かっているんだけどさ」

一夏が察してくれたらしく、外にいてもらうように言うと2人は静かに出て行く。

「じゃあ、オレ達は今から千冬姉に試合の事で事情聴取に行くからな。お前のことは後でいいってさ」

「ねえ、一夏…」

あたしは最後に出て行こうとする後ろ姿の一夏に輝の事について一つ質問する決意をした。

「輝の家族の事…アンタは聞いた？」

「……聞けなかった。いや、聞けなかったよ」

「一夏はどう思う？やっぱり輝は家族を…」

「……」

3年前にいなくなってひょっこりと帰ってきた輝はアメリカで今まで生活していたと言った。

もし、輝の両親が生きているならもっと前からこっちに帰って来てもおかしくない。

もし、明が生きているなら報告してくれるはずだと思う。

けど実際はそんなことは一つも言ってくれなかった。
「ならあたしは輝の気持ちをちょっとだけ理解出来るかも」
あたしも一年前に両親が離婚して家族がバラバラになった時は何も考えれなくなった。
でも輝はあたしと違ってもう二度と両親に会うことができない。
「あたしって酷いよね。輝に明の事を何度も聞いたんだから…」
「鈴、それはお前だって聞く時はつらかったんじゃないのか」
「…ええ、自分でも痛かったわよ」
「お互い待とうな。輝がそのことを話してくれるまで」
「…うん、わかったわ」
「…鈴。一応、授業はちゃんと出ろよ」
一夏が保健室からそう言って出て行くとあたしはまだベットで眠っている輝に顔を向けた。
「輝…早く眼を覚ましてよね？あたしや一夏達が心配しているんだから」
≪輝ｓｉｄｅ≫

（……ここは？）

全然働かない頭を無理やり起こして周囲を見て状況を把握する。

時計を見ると時間はすでに放課後を指しており、夕日が窓から入り込んでいた。

どうやら保健室らしい。

「すぅ……すぅ……」

そして何故かオレのベットに顔を置いて寝ている幼馴染の鈴がいる。

「くふっ……♪」

「いったい何の夢を見ているんだよ鈴」

久しぶりに見た無邪気な可愛らしい幼馴染を見て、苦笑しつつも起こすべきかそれともまだ寝させてやるべきかと悩む。

きっとオレの見舞いに来たついでに寝てしまったんだろうな。

さて、まあ鈴には悪いけど起こすか

「んん……っ！！」

起こそうと決意した瞬間、鈴の表情がさっきまで幸せそうにしていたのに眉を八の字に歪め、苦しそうな表情に変化する。

「……ら」

「ん……？」

鈴が発したのは寝言のようで小さくて聞き取りにくい声だった。

「……どこにも…いない」

さらに苦しそうになる鈴。いったいこいつどんな悪夢を見ているんだ。

「おい、起きー」

「どこ…！あきら…あかり…！？」

「！！！」

今度の鈴の寝言はしっかりと聞こえてきた。体は４月だと言うのに真冬の寒さに耐えるようにふるふると震え、血の気が段々と引いているようにも見える。

「……ねえ……ほんとうに……あえないの……？」

「……」

鈴の悪夢はどうやらオレと明が居なくなったことを思い出しているらしい。

鈴と初めて出会った際にこいつは心を閉じかけてクラスに馴染めずにいた。そこでオレは半年前に自分達の学校に転校してきた義妹の

明を紹介してやった。

まあ、最初は互いにうまくいかなかったけど鈴がいじめられている時に勇気を出して鈴をかばった明と打ち解けてお互いに大親友にまでなった。

でもオレと明は結局、中一の時に一夏や鈴達と離れ離れになってしまった。

『また一緒になれたね。これから3年間よろしくね、鈴ちゃん、一夏さん、そしてお兄ちゃん』

明が中学校の入学式で俺達が同じクラスメイトになれた時に言った言葉だ。けど実際に一緒にいることができた期間は経った半年だけだった。

「……あっ……」

オレは震えている鈴の両腕を握ってやった。小さくて冷たい手だったが段々と鈴の震えが収まっていく。オレじゃあ明の代わりに慣れないだろう。

でもこんな不安になっている友を安心させてやりたいと思った。

「大丈夫だ鈴。オレはここにいる。」

「……うん…」

優しく言い聞かせるようにささやくと鈴は安堵の表情を浮かべすやすやと寝始めた。

「まったく、お前も可愛らしいところがあるじゃねえか」

≪鈴ｓｉｄｅ≫

（……あれ、あたし）

午前の授業には出ることはできたが昨日から目を覚まさない輝のことがどうしても気になってあまり授業が身に入らず、あたしは担任に調子が悪いから保健室で休憩すると申し出をして保健室でまだ寝ている輝のそばに腰かけて、それから……

「よう、起きたか鈴」

ひょいっと目の前に輝の顔が現れた。…ってあれ？

「…あきら？」

「おう、そうだが何か？」

「……あんた一体いつ起きたの」

「今から一時間前ぐらいかな。お前が横ですやすやと寝ていたから隣の空いているベットまで運んでやったぞ」

ベットから上半身を起こすと輝がＩＳ学園の制服姿で横にいた。中一の時よりトレードマークの長く綺麗な髪の毛はさらに伸びて後ろで束ねられている。あの時より背もずいぶんと伸びている。

初めて会ったころから女の子見たいと思っていたが今では女装すれば絶対にばれないんじゃない？と思うほどきれいだ。

「ずるい」

「ん？なにがだ」

「な、なんでもないわよ」

あたしはベットから降りて、保健室に置いていた荷物を手に取る。

「あれ、なんであたしベットで寝ていたの？」

確か輝のベットに腰かけてそれから寝てしまったとしても隣のベットに移動する手段が…。

「……お前が自分で移動したんだろ？」

「ならなんでこっちを見ないの」

輝は明後日の方を向いて目線を合わせないようにしている。正直言ってすごく怪しい。

「言っていいのか？」

「言いなさい」

「怒らないか？」

「保障はできないわ」

ムムムと考えるような顔つきで唸っていたがついに決心したようであたしと視線を合わせる。

「首根っこ持って放り投げた。よく飛んだぞ」

……ブチッ！

「あきらぁぁぁっ～！！！死ねねねぇぇぇぇっ！！！！！」

あたしは素早くＩＳの部分展開で右腕を展開し輝に殴りかかったが、輝もＩＳを部分展開しそれを防ぐ。

チッ、生意気ね！男なら堂々と受けなさいよ！！

「死になさい！今すぐ死になさい！！」

「嘘だ！冗談だ鈴！！って本当に止めてくれ、紫電で髪を焦げているから！！！」

だんだんとあたしの右拳が輝の腕を押していく、これなら―。

「悪い、ちょっと荒業仕掛けるぞ鈴！」

「えっ？」

急に左手で右腕を掴まれたかと思うと素早く輝が後ろに下がり、バランスを崩し、次の瞬間には宙を舞ったかと思ったら輝があたしの背中に片手をそえてくれ、あたしはベットに落下した。

けど全く衝撃はなく、まるで綿のようにふんわりとした感触だった。
そして、あたしの上に覆いかぶさるようにいる輝。
うわぁ、近くで見ると三年前からずいぶんと男らしく…何思ってんのよあたしは！
「まさか小学校からの付き合いだったからちょっと冗談をかましたらこうなるなんて思わなかったぜ。でもそれにしてもずいぶんと強くなったな鈴」
「あ、あたりまえよ、あの頃とは比較にならないわよ……っていきなりなにすんのよ！」
「ぐふぉっ！」
右足で輝を吹き飛ばし、床に勢いよく転がる。
「立てるでしょ輝。あんたがあたしの蹴りに対して受け身の動作を取ったから手ごたえがないからダメージはないはずよね」
「やれやれ、相変わらず口より手が出るタイプだな鈴は」
ムカつくぐらいにむくっと何事もなかったかのように輝は立ち上がり、あたしもカバンを持ち輝と共に保健室を出る。
外はすっかり暗くなってしまい、今、下校しているのはあたし達だけだ。
「ねえ、試合での怪我は大丈夫？」

「体が所々わずかに痛むけど問題はないな」

「……ごめん、あたしが油断したから輝が庇ってこんなことに」

「気にするな。オレは守りたいものを守れたからいいんだ」

「えっ…」

守りたいものって……あたし！？うわ、どうしようこれって絶対―。

「一夏やお前、それに学校のみんな。オレの力で一人でも守ることができて本当によかったよ」

「……ふ～ん、それはよかったわね」

「？」

え～え、どうせそんな事だろうと思いましたよ。

一夏といい、輝といいなんでまともな男ってこんな奴らばっかりなのよ！

「なあ、鈴。お前一夏とはどうなったんだ？」

「そのことならもう昨日の内にお互いに謝ったわよ」

昨日一夏が目覚めたと聞いて保健室をちょうど出るところだった一夏とばったり出くわして、その際に話をして互いが悪かったていうことで話はついたけどね。

「で一夏との約束の話はどうなったんだ？“確か毎日酢豚食べさせてあげる”っていう大胆な約束だったんだろ」

「うっ…」

それは確かにそうだったが…。

「あの約束はね…別に深い意味はないわよ」

「へっ？」

なにしろその約束をしたのはあたしが中二の時で父さんと母さんの話で離婚の話まで持ち上がっていた時、あたしは輝と明を失った後のためさら不安になっていた。

だから国に帰っても何か将来の目標を持ちたかったから、輝との前の約束も忘れ一夏とあんな勢いだけで結んだ約束を馬鹿みたいに強調したことに今では自分で自分が嫌になった。

もちろん一夏にだって好意はあったけど…あの頃のあんたほどじゃあなかったのに―

だいたい…あんたが勝手にいなくなるからいけないんでしょうが……

だから輝がＩＳ学園にいた時、あたしは驚きと怒りを持っていた。

だから今まで連絡をくれなかったから同じように無視してやった。

でもだんだんと日にちがたって行くにつれてそれができなくなっていった。

だから余計に無視しようとしたけれどできなかった。
自分でもわかった。輝を思っていたころに気持ちが再び浮き上がっていることに。
かつて封印した気持ちがまたうずいているんだと。
そして輝が敵ＩＳの砲撃から庇ってくれて、気絶している輝の顔を見ると清々しいぐらいの何かをやり遂げれたかのような笑顔を見たときあたしの過去の輝の顔と重なった。
転校してきて他のクラスの男子達に嫌がらせをされている時に明が庇ってくれ、輝と一夏が男子相手に立ち回りした後、あたしに見せた笑顔。
そして宿泊研修時に皆とはぐれてしまい怪我をしたあたしをおぶって下山した時、皆と合流した時に見せてくれた笑顔。
そしてあたしはまたわかった。轟輝を再び好きになったことを―
「それは本当なのか鈴？だとしたらお前すごいチャンスを逃しているぜ」
ムカッ！
「だから深い意味はないって言っているでしょうが！」
あたしは馬鹿を置いて早く帰ろうと駆け足になった。
「鈴悪かった！何で気に障ったのか分からないけど謝るからさ」

輝も同じように早足で追いかけてくる。

ふん、追いかけてくるならさっさとあたしの横に並びなさいよ。

少しだけスピードを落としてやると輝は再びあたしの横に並ぶ。

「それにしてもこうやって二人で帰るのはずいぶんと久しぶりだな」

「そ、そうね。あんたこそ3年前よりずいぶんと大きくなったわね」

「そうか？お前こそ……髪がすこし長くなったな」

「ちょっと待って輝。それだけ？」

そう尋ねると何故か輝は可哀想なものでも見るような目つきでこっちを眺めてくる。

「……わりぃ。三年前とあまり変わってない幼馴染への言葉が分からない。体重も相変わらず軽かったぐらいで…」

ちょっとそれはないんじゃない！？と言いかけようとしたところであることに気づいた。

“体重も相変わらず軽かった”？

「ねえ、その体重も相変わらず軽かったってどういう意味よ」

輝はしまったというような表情で目線をそらし始めた。むっ、怪しいわね。

「深い意味はない…忘れろ」

「いや、答えて」

「絶対嫌だな、なんで答える義務なんてー」

「あんたの恥ずかしい過去をＩＳ学園の新聞部に言うわよ。まず小六の学芸会の時に明と一緒にステージでー」

「それだけはマジで勘弁してください鈴さん！」

道のド真ん中で迷いもなくいきなり土下座をする輝を見てあたしはどうしようかな～と呟きながら輝をじらす。

「じゃあ、は・な・し・て・く・れ・る・よ・ね？」

すごく気まずさそうに輝は顔を歪め、そっぽを向いて小さな声でとうとう言った。

「そりゃあ……さっきお前をベットに移した時に持ち上げた感想だよ…」

「えっ？」

「だってお前、中学校の宿泊研修でおんぶした時があっただろ…？その時と比べて今もお前やっぱり軽いなって…」

頬をぽりぽりとかきながら輝は照れくさそうにいいながらちらちらとこっちを向くがあたしの心境はもっと大変だった。

（宿泊研修の時のアレをまだ覚えてくれてたんだ／／／で、でもさっきベットに運んだってもしかしてアレなの！？もしかしてお姫様だっこなの！？）

「…い……こい……」

（でも、あたしだってあの頃と比べて成長したんだから！そりゃあ…胸は……で、でも輝の好みはまだ知らないし―）

「戻って来～い鈴」

「えっ？」

「何立ち止まってんだよ？さっさと行くぞ」

輝が先にいつの間にか進んでおりあたしもそれに追いつく。

「なあ、鈴のおじさんやおばさんは元気にしているか？またお前の家の中華料理を食べたいんだけどさ。あの青椒肉絲やラーメンは特にうまかったからさ」

……。

「ごめん……もうお店は……していないんだ」

「え？」

「あたしの両親、離婚しちゃったから……」

「……それは、すまん…」

気まずい雰囲気があたし達の間に流れる。

寮が段々と近づいてきた時に輝の方からこの沈黙を破った。

「鈴、これから言うことは聞き流してくれても構わない。しかも、ただのオレの理論だから嫌なら止めてって遠慮なく言ってくれ」

「……」

「家族っていうものは元々違う道を歩んでいた人間同士が一緒になって歩むことで家族になるもんだ。けど一緒に歩むにつれて僅かながらズレは出てくる。けどかつて一緒に歩むことを決めた者同士どこかまた惹かれあうことがあるはずだと思う」

「……」

「それは一瞬のことかもしれない。でもその一瞬が何かのきっかけになるとオレは信じている。だからその時を考えてお前は言葉を考えてみるのも悪くないんじゃないのか。お前ってさ羨ましいぐらい前向きに物事を考えてそうなるようにいつも行動しているだろ？」

「……ありがとう輝。心配してくれて」

こういう輝の気持ちは本当にうれしい。

けれどあたしは両親にそんなことを言える日が来るなんて今はまだ思えないよ…。

≪輝ｓｉｄｅ≫

生徒寮の手前で鈴を送り出し、オレは教師寮に向かって歩き、人目がないことを確認すると後ろを振り返って曲がり角の方に向く。

「立ち聞きとは趣味が悪いですよ千冬さん」

「いきなり保健室から出ていったお前に言われたくはないな。それに心配するな、凰と別れた後にお前を見つけたから内容は全く知らん」

いつもどうりのスーツ姿で千冬さんは角から姿を現した。もうここまでくれば壁からどんでん返しで出て来てもおかしくないと思えるのはオレだけだろうか？

「体は大丈夫か轟？」

「ええ、問題ありませんよ。一日中寝ていたなんてにわかに信じられませんが」

「今日の授業内容は今のお前なら知っている所ばかりだから今後の授業には影響ないぞ」

「そうですか、アメリカで頑張ったかいがありました」

「でだ、話は変わるが第一アリーナで第二アリーナと同種と思われるＩＳの残骸を発見したがあれはお前がやったのか？」

「ええ、アレを破壊するのがオレの使命ですから」

否定する気は全くなくただその言葉にうなずいた。

「使命か…その言葉通りに“命を使う”ということもお前は肯定する気なのか」

「わかって言っているんですか千冬さん？オレはもう進むしかないんですよ」

「…そうか、しかし今回の所属不明機との交戦に関するレポートと事情調査、単独で迎撃に移った反省文と今後そのようなことをしないと誓うための誓約書、さらにＩＳ学園内での各教室掃除一週間間の罰は受けてもらうぞ」

随分と少なめだな。千冬さんの事だからさらに個人的な作業をオレに押し付けたり、掃除に関しても一ヶ月、懲罰部屋３日間ぐらいの勢いだと思ったんだけどな。

なにしろ目の前の鬼は鬼ヶ島の鬼でさえ『もう許してやって姉御！そこの村人たちの体力はとっくに０でっせ！！』というぐらいの慈悲すら沸かせる―

バシッ！

「馬鹿なことは考えるな」

「その前に頭が物理的に壊れそうなんですが…」

いつの間にか距離を詰められ、出席簿の角で遠慮なく叩かれタンコブを『痛いの痛いに飛んで行けー』と心の中で思いながら刺激しな

いように撫でる。

でもやっぱり痛みはすぐに引かない。

千冬さんと別れた後自室である教師寮の仮眠室の前まで来ると奥の廊下からクラスの副担任である山田先生がこちらに向かって走っている。

「どうしたんですか山田せ―」

「やっと見つけましたよ轟くん！保健室から勝手に抜け出したらいけないじゃないですか！いったいどこにいったのか心配で…」

あ、確かに保健室から出ていった際に黙って抜け出したのは少々まずかったらしい。

千冬さん、山田先生には連絡してあげてください。今にも泣きそうな顔をされてこっちも泣きそうなんですけど。

「すいません、山田先生。黙って出て行ってしまって」

「まあ、轟くんが無事で本当によかったで。体の方は大丈夫ですか？」

「はい、問題ありません」

大丈夫な事を伝えるため、腕を上下に数回動かしてそのことを伝える。

「本当ですか？本当に痛いところはありませんか？」

「ええ、こんなこともできますよっと！」

「うわわわわ！！」

後ろに一歩下がったオレはその場でバク宙をこなして見せて、問題ない事をさらにアピールした。ゴキッと足が言ったような気がしたがそこは脂汗を流しつつも精一杯作り笑顔を作る。

「す、すごいですね、轟君は！！」

「ええ……まあ……」

くっ、本調子なら余裕でこなせたんだがまだ体力が回復してなかったのか…地味に痛い。

「山田先生、いったい何の用事で…って輝！」

まだ足の痛みが引いていないため床に膝をついていると玄関から昔からの親友である一夏が現れた。

「んっ？おお、一夏かどうしてここに？」

「どうしてって山田先生が俺に用事があるって……それよりもお前大丈夫なのか！？昨日はまったく起きないから心配にだったんだぞ」

「ああ、今は全く問題ない」

「……じゃあなんでそんな恰好してるんだ？」

山田先生と一夏の間で片膝をついたまま会話を続けるオレってやっぱり怪しいのか？

十中八九の人間がこういうだろ。『うん、怪しい』。

「いや、なんだ……それより一夏。山田先生に呼ばれていたんだろ？」

「あ、そのことなんですけどね」

「悪いな一夏、手伝ってもらって」

「別にいいぜ俺は。それより輝、これは一体どこに置けばいいんだ？」

オレは今、一夏の部屋にいる。

山田先生から『篠ノ之さんを別の部屋に移動してもらったのでようやく轟君を生徒寮へ入れることができます。でも轟君だけじゃあ引っ越しするのが大変かと思いまして織斑君には手伝ってもらうために来てもらいました』と言われ、今こうして箒が使っていた場所に荷物を広げている。

足の痛み？そんなのは気合と根性でなんとか克服した。

偉い人にはそれがわからないんですよ。

「それにしても、ＩＳ学園以外にもＩＳ関連の専門資料が多いな」

「専用機持ちになると普通はそのぐらいは頭に詰め込まないといけないんだよ」

研究所での訓練にも講座が一日5時間はあり、それらを覚えることもかなり大変だった。

特に博士の授業では間違えるごとに白チョークがマシンガンのように飛んできて、研究所内では一時期『白デコ助』って不名誉過ぎるあだ名ををつけられたもんだ。

（それにしても箒には悪いことしちまったな。あとで何か手を打っとくか）

せっかく一夏と二人っきりの時間がオレによって奪われたから多少は気が引ける。でも箒よ、さっさと動かないと恋敵に一夏を取られるぞ？

こいつオレがいない間にさらに女の子を無意識のうちに引きつけたんじゃないか？

「あ～あ、やっと終わった。今、食堂空いてるか？」

「わからないな。でも輝、お前夕食食べてないんだろ」

「ああ、ってもういいや。カロリーメイトがあったからそれ食うわ」

バックの中からカロリーメイト（チーズ味）を取り出し、それを食べる。

バグバグ…モグモグ……うますぎる！！！

アメリカ合衆国ミシガン州デトロイドにあるＩＳ開発研究所『バード・フライト』

ＩＳ開発研究所最高責任者であるフィリシア・エンドレイ博士はテストパイロットと技師長と共にＩＳ学園から送られた映像を見ていた。

２つのモニターには一夏と鈴が倒したＩＳ，もう片方のモニターには輝が倒したＩＳがそれぞれあらゆる角度から映し出されている。

「どう思う、リーゼロッサ、サラ？」

「ほぼ間違えなくどちらとも聖戦協会の無人ＩＳですね。でも明らかに設計が違います」

「リゼっちの言っていることは確かだよ博士。ＩＳ学園第二アリーナで撃墜されたＩＳはプロトタイプ“カラミティ”と酷使している。けどアッキーが倒したＩＳはまるでこっちのホークシリーズに対抗するための兵装だ」

「ホークシリーズは対ＩＳ戦においてステルス性と機動性、攻撃力を重視し、高機動戦闘での圧倒的制圧力を想定して開発されています。しかし攻撃力の面ではまだ開発が遅れており敵はそれに目をつけ防御力を重視したと想定されますね」

「ついでに言うと２機ともあまりいい結果は得られないね。撃墜と

同時にハードコンピューターにウイルスがばらまかれて、残っているデータはおそらくどうでもいいものばかりだよ」

「そう…まあ、できるだけやって頂戴。後は任せるわ」

「了解です」

フィリシア・エンドレイはそういいながら部屋を出て行き、自室に向う長い廊下を歩い続けると直属の秘書がこっちに向かってきた。

「博士、失礼します」

「あら、どうしたの？あなたがここまで来るのは珍しいわね」

「ええ、一応、Ｍｒ．アキラの事について報告をしようと思いまして」

「かまわないわ、話しなさい」

廊下を歩きながらフィリシアは無人ＩＳの事を考えながら秘書の話を聞くことにする。

「では、アキラ・トドロキの報告レポートの閲覧レベルをレベルを二つ下げた世界中の反応ですが想定以上の動きは今のところありません」

「当然ね、彼はの扱いは二年前にアラスカ条約で可決されされたもの」

「はい、レポートもここ二年間の裏工作が功をなしてうまくいって

いますし、彼がＩＳに操縦できる理由として“二卵性双生児の遺伝子変化により男子として誕生した”という説は有効のようです」

「そのことは実際に事実なんだから裏は全くないわ。けどそれだけじゃあＩＳは動かない」

「はい、その通りです。で、博士。こういう事態になった場合、プランＢ１が発令されるのですが、ＩＳ学園のＭｒ．アキラのＩＳの制限設定についてはどうしましょうか？」

「今後の事も考えてプランＢを実行。むろんアレは時間制限有りで承認するわ」

「了解しました。ただちに工学班と会議を開きます」

「ええ、任せるわ」

秘書と別れたフィリシアは自室の扉を開けるため指紋承認を行い、素早く本人と認識したシャッターが開く。

室内にはいくつもの紙の束が散らかり、無造作にばら撒かれている。

「あ～、掃除まだだっけ…まあ、後で頼みましょうか」

部屋の中央にある大きな机の卓上にあるパソコンの電源を付けて、椅子に座り机に埋め込まれたリモコンを操作すると天井から巨大なモニターが下りてきた。

「さて、これを使うのは久しぶりね～。あと３分４０秒ってとこかしら？」

モニターを付け、パソコンを開いて行くうちに回線がつながった。

『久しぶりだなフィリシア』

モニターの立体画像モニターに姿を現したのはかつて三年に一度行われるＩＳの世界大会『モンド・グロッソ』の第一回優勝者であり、ＩＳ学園の教師織斑千冬だ。

「ええ、そうね千冬。久しぶりにお酒でも飲みに行かない？」

『そういう用件で連絡を入れたならば切るぞ？』

「ふう、わかったわ。本題に入りましょう」

それから2人は今回の事件について過去の記録を照らし合わせながら話していった。

「ふう、このぐらいかしら」

『すまんな、個人的な依頼を申し込んでしまって』

「気にしないで千冬。高校からのよしみじゃない。それにこのＩＳについてはこっちの畑よ。ＩＳ学園が関与することじゃないわ。」

『……フィリシア、一つ尋ねたいことがある』

「どうしたの千冬？」

『輝が撃墜されて保健室に運ばれた時、奴の左腕の皮膚はＩＳの絶

対防御を貫通してかなりの部位で火傷を負っていた。それにも関わらず1時間程度でまったく火傷の痕など見られなかったが、それは――』

「ええ、あなたが思っている通りよ千冬。彼のＩＳは――――――の――――よ」

『あなたに問う。何故戦う？』

オレは…それが使命だからだ

『使命……それはあなたがそう思っているにだけに過ぎません。本当は――を望んでいます』

……確かにそうかもしれないがそれじゃあ人は前に進めないな。だからオレは―

『いえ、あなたは前に進む気などありません』

馬鹿な…何を根拠に言っているんだ？

『それはあなたが一番よく知っているはずです、轟輝。思い出してください、あの時を、あの屈辱を、あの悲しみを、あの虚しさを』

黙れ！お前に何がわかるっていうんだ！？

『よく知っています。なにしろあなたは私だ』

はっ？どういう意味だよ。

オレが後ろを振り向くとそこには――がいた。

自分でも震えがだんだんと大きくなり、歯がかみ合わなくなっていくのを感じる。

無意識のうちに左腕で胸をさすり始め、だんだんとかきむしる動作へと変わっていく。

『これでわかりましたか？』

――がいなくなったかと思うと次の瞬間にはオレの周りに数多くの画面が映し出される。

男が女を庇ったかと思うと周りが一気に炎に包まれる画面。

一面が真っ赤な画面では黒い何かに引き金を引く者。

そして数多くの星が見える夜空でこちらを見下している者の画面。

『あなたが私にした願いを心から変えない限りは私は変わらない』

ポンと誰かに肩を叩かれ不意にそちらの方へ向くが誰もいない。

いや、離れた所に一組の男女がいた。

一人でオレでもう一人は初めて出会ったころの明だ。もう一人のオレは明に向かってサーペント？を向けて、小さい頃の明は怯えている。

「っ！やらせるかよっ！」

オレはアクティブ・ホークを起動させて、素早くもう一人のオレの行動を止めようとしたが突如、目の前に巨大な大剣が現れオレは急いで回避行動を取る。

「がはっ！」

だが回避が間に合わず、左腕に激しい痛みが走り、前を見ると血のように赤黒くペイントされたＩＳがいた。そしてその奥には明にサーペント？の銃剣を振り下ろしているオレがいる。

『助けようと本当に思いたいなら、そう思うことです。じゃないと助けられません』

もう一人のオレは明を切り裂き、顔にべっとりと血が付いた。

「――ッ！！」

急に景色が変わり、何故かホテルの個室のような部屋にオレがいる。

「――はぁ……はぁ……はぁ……！！」

早鐘（はやがね）のような心臓音と荒い呼吸をしていくうちにオレはここがＩＳ学園の寮の室内で昨日から一夏と同じ部屋になったことをようやく思い出した。

それにしてもまだ疲れているのか視界がぶれている。

「……い！大丈夫か、輝！？」

「…ああ、なるほどな……大丈夫だ一夏」

どうやら視界が揺れていた原因は一夏に肩をゆすられていたためだった。

「本当か？すごくうなされていたけど」

「心配するんな……それより悪い、起こしてしまって」

「気にすんなよ、それより服を着替えた方がいいんじゃないのか？」

一夏に指摘されたとおりオレのTシャツは汗でべっとり濡れていた。

「じゃあお言葉に甘えてジャワ―借りるぞ」

オレは着替えを持ってシャワールームに入り、べっとりと体に纏いついたした汗を洗い流す

「オレは…いったい何を……？」

シャワーを浴びながらオレは考えていた。

さっき見た夢を全く覚えていないのだ。

断片的なことでさえ覚えていないまるで蜃気楼を見たかのような感覚だ。

「くっ！いったいなんだっていうんだよこの感じは…」

しかし胸の奥には何とも言えないもやもやとした気持ちが漂っている。

べっとりとした汗をすべて洗い流した俺が部屋に戻るとそこにはココアを入れている一夏がいた。

「今ココアを用意したんだ…けど……？」

どうしたのか一夏はこっちを見てポカンとしている。

お～い、どうしたんだその顔に誰だこいつ？みたいな表情だしやがって。

「一夏、どうしたんだ？」

「いや、お前。髪下ろしてるから……。綺麗だなと…」

「っ！！バ、バカヤロウ！そういうセリフは箒とかにいうもんだぞ！？」

「す、すまん…」

くっ、どいつもこいつもオレが髪を下ろした時に同じような反応ばっかしやがって！！

手首に付けたままだったゴム紐を外し、素早く後ろ髪を束ねいつもの髪型に戻る。

寝る前にシャワーを浴びた時にはシャワーを出る直前に髪をくくったので髪を下ろしている姿を一夏に見せるのは久々だった。

「どうだ！これでいいだろ！！」

「おお、いつもの輝だ」

「まったく、野郎相手に殺し文句いってどうすんだよ。ココア貰うぞ」

一夏の横に会ったココアをぶんどって喉に流し込むが正直熱かった。

くっ、まだ飲む温度に適してなかったのか…

「まだ熱いぞ輝」

「おせえょ…」

ぐっと我慢しつつオレはベットに腰かけながらココアを冷まし、一夏も同じように自分のベットに腰かけスプーンをかき交ぜながら冷やす。

オレが一夏に向けてカップを向けると一夏も同じようにカップを向けてくれる。

「「乾杯」」

ココアを飲んでみると今度は程よい熱さと甘みが喉を通過する。

「相変わらず一夏のココアはうまいな。明は甘過ぎるし、鈴はかき

混ぜないから底に溶けてない塊があったな」

「懐かしいな。でもオレも千冬姉の気に入ったコーヒーを出せるようになれたのは結構かかったよ」

「あの人好みね。そりゃあ弟のお前しかわからないだろ」

そんな他愛もない会話を続けて行くうちにポットのお湯は切れてココアは終了。オレ達は再び寝床にはいった。

「おやすみ輝」

「ああ、おやすみ一夏」

「あと輝、お帰り」

!?

「いきなりどうしたんだ一夏」

「いやお前がこっちに帰ってから今までお帰りの一言も言えなかったからな」

お帰りか……まだ、日本に帰ってもそう言ってくれる人物がいたのか……。

「一夏……おやすみな……そして、ただいま」

「ああ」

一夏…ありがとな。

今度こそオレはいい夢を見られると思いながら瞳を閉じる。

第十話　男だからこそ中々言いづらいことだってある（後書き）

“二卵性双生児の遺伝子変化により男子として誕生した”というのは“元々、双子として生まれてくる予定だったが遺伝子変化により一人の男子として生まれた”という意味です。

あと、鈴の約束がかなり曖昧なのは私の設定不足&力のなさです、ごめんなさい。
次の次ぐらいに主人公と鈴との約束が出てきます。っていうかここの鈴、精神面が原作より弱いな……。

次回は設定を投稿します。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7591n/

IS『奇跡の生還者』

2011年2月4日22時44分発行